瀟洒な召し使い

グランド・オブ・ミル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

完全で瀟洒なメイドとなってドラゴンボールの世界に転生した主人公の、必死に生き抜く物語。

目次

原作前、無印編・1 …… 1
原作前、無印編・2 …… 4
原作前、無印編・3 …… 7
原作前、無印編・4 …… 12
原作前、無印編・5 …… 16
原作前、無印編・6 …… 24
原作前、無印編・7 …… 30
原作前、無印編・8 …… 34
原作前、無印編・9 …… 39
原作前、無印編・10 …… 45
原作前、無印編・11 …… 49
原作前、無印編・12 …… 56
原作前、無印編・13 …… 59
原作前、無印編・14 …… 65
原作前、無印編・15 …… 74
原作前、無印編・16 …… 83
原作前、無印編・17 …… 89
原作前、無印編・18 …… 94
原作前、無印編・19 …… 104
原作前、無印編・20 …… 111
Z・ナメック星編・1 …… 121
Z・ナメック星編・2 …… 127
Z・ナメック星編・3 …… 133
Z・ナメック星編・4 …… 142
Z・ナメック星編・5 …… 150

Z・ナメック星編・6 ―――― 161
エピソード・オブ・ラディッツー1 173
エピソード・オブ・ラディッツー2 186

原作前、無印編・1

◇

「……こちらでございます。フリーザ様。」

宇宙一の戦闘民族サイヤ人の母星、惑星ベジータ。そしてその星の王、「ベジータ王」は後ろを歩く3人の者に自分の城を案内していた。その3人とは宇宙の帝王フリーザとその側近、ザーボンとドドリアである。

サイヤ人はツフル人の故郷ツフル星を征服し、惑星ベジータと名を変えて自分達のものにした。さらに、ツフル人が持っていた高度な科学力も手にし、近くの星を片っ端から襲って自分達の縄張りを増やしていた。

だが、そんな時サイヤ人に転機が訪れる。宇宙の地上げ屋を行うフリーザ軍の親玉フ

リーザに、軍の舎弟に入ることを命じられたのだ。
高いプライドを持つサイヤ人はもちろん反発したのだが、下っ端兵はともかく、ベジータ王ですら敵わない強力な戦闘力を持つフリーザとその側近ザーボンとドドリア、さらには5人のエリート戦士で構成されるギニュー特戦隊にはとても敵わず完敗。サイヤ人は屈辱的ながらもフリーザ軍の劣兵として働くことになってしまった。
そして当然フリーザ軍の劣兵となったからには、サイヤ人の情報は洗いざらい吐かされることとなった。ベジータ王が話している最中、ずっと適当に相槌をうつだけだったフリーザだが、一つだけ興味を示した話があった。
サイヤ人はツフル星を征服した際に、ツフル人は全滅させたのだが、一人だけ殺さずに、惑星ベジータの城に幽閉しているという。その者は不思議なことに何をしても死ななかったそうだ。四肢を引きちぎっても、首を切ろうとも、エネルギー波で消し炭にしてもどうやっても殺すことができず、さらにその戦闘力もすさまじく、サイヤ人のエリート戦士何人かでようやく捕縛することができたという。
それはおもしろいと思ったフリーザはすぐさまベジータ王に案内させ、そして今に至るというわけだ。ベジータ王はどんどん城の地下へと進み、フリーザ達はついていく。
「フリーザ様、その者を一体どうするおつもりですか?」
「ほほほ、決まってますよザーボンさん。ぜひともうちの軍に入ってもらおうと思いま

す。」

歩きながら質問するザーボンにフリーザは口元に手をあて、上品に笑いながら受け答えする。

「しかし、得体が知れませんぜ?」

「大丈夫ですよ。いくら死なないとはいえ、強さでは到底私には敵いませんから。」

ドドリアも若干不安そうに尋ねるもフリーザは笑みを崩さない。それほどまでにフリーザの強さは圧倒的なのだ。これまでの人生でも、親以外では埃をつけられたことすらない。帝王の名に相応しい力を持っていた。現にサイヤ人との戦いでも、ほとんど力を出すことなく勝ってしまっている。

「……こちらでございます。」

そんな会話を背に、屈辱に身を切り裂かれながらもベジータ王は問題の地下室にたどり着いた。ベジータ王は振り向き、掌を上に向けて地下室の扉を指す。

「では、ご対面といきましょうかね。」

そう言ってフリーザはその重たい扉を開いた。

原作前、無印編・2

◆

重たい扉（フリーザにとっては紙のような重さだが）を開けたフリーザの目に飛び込んできたのは一人の少女だった。両手に手錠をかけられて天井から吊るされているが、その姿はとても美しい。髪は輝く銀髪であり、目は冷めるような青。メイド服を着ていることから、ツフル人の王の召し使いか何かだったのだろう。パッと見た感じではとてもサイヤ人を脅かすような戦闘力の持ち主には見えない。

「ベジータ王、こいつが例の不死身の者か？」

「……はい。」

「へっ、どんな凄いヤツかと思えば拍子抜けだぜ。戦闘力もたったの１０だ。」

ドドリアがスカウターで少女の戦闘力を測るが、測定された数値は１０。とても強い

とは言えない。だが、フリーザには見えていた。この少女の底知れぬ実力が。
「彼女に食事は与えているのですか？」
「…いえ、また暴れられては我らへの被害が甚大故、食事を与えず、餓死を狙っているのですが、この通りまったくこたえておりません。」
　とりあえず聞いてみたフリーザだが、思惑は当たっていたらしい。どうみても目の前の少女は衰弱していたからだ。不死身でも食事がなければ衰弱するらしい。戦闘力が低いのもその為だろう。
「まあ、いいです。まず彼女を回復させましょう。」
　そう言ってフリーザは右手の人差し指で天井から彼女の手錠に繋がる鎖を指した。そして指先からビッと光線を発射して彼女の鎖を切る。
「あなた、お名前は？」
「……ＤＢ１１１―Ｔ２０００ＲＳ。」
　崩れ落ちる彼女にフリーザは歩み寄り、名を聞いたのだが返ってきたのはよく分からない英数字の羅列だった。これにはフリーザも首をかしげる。
「一体それは何ですか？」
「私の製造番号です。」
　尋ねればポンと答えは返ってくる。なるほど、恐らく彼女はツフル人が造り出したサ

イボーグのようなものなのだろう。全宇宙でも指折りの科学力を誇っていたツフル人だ。彼女のように、人間と大差ない程の精巧な人造人間を造り出すことも容易であるはずだ。

　とはいえ、彼女を雇うにあたっていちいちその製造番号で呼ぶのはいささか面倒臭い。そこでフリーザは聞いてみた。

「それがあなたの本名なのでしょうが、何とかなりませんか？そのままではとても呼びにくいです。」

「……それでは”咲夜”。私のことは”十六夜咲夜”とお呼びください。」

「ほう、それはあなたを造った親の名か何かですか？」

「いえ、ただ私の知る中で完全で瀟洒なある人物の名を頂いただけです。」

　すると彼女は少し考えて自身を”十六夜咲夜”と名乗った。その完全で瀟洒な人物が気になるがまあいい。コホンとフリーザは咳払いをし、改めて彼女に切り出した。

「では、十六夜咲夜さん。私の下で、フリーザ軍で働いてみる気はありませんか？」

　それに対する彼女の答えは……

「はい。よろしくお願いいたします。」

　Ｙｅｓだった。

原作前、無印編・3

◇

皆様お初にお目にかかります。紅魔館のメイド長、十六夜咲夜でございます。

何をバカなと笑い飛ばされるかもしれないが、私は忠誠心が鼻から出ることで有名なＰＡＤ長になっていた。しかも、私がいるのは死亡フラグの宝庫ドラゴンボールの世界だ。正直泣きたい。

憑依、転生というやつだろうか。とにかく私は十六夜咲夜になっていた。鏡で顔を見た瞬間驚きで凄い勢いの後ずさりをして、頭を壁に打ちつけたのは今ではいい思い出だ。

私はツフル人が開発したツフル王専用の召し使いマシンミュータントだ。それに何故か知らないが、平凡な日本人の私が憑依してしまった。

ドラゴンボールは結構知ってるほうだ。日本人なら一度は聞いたことがあるだろう超人気漫画だ。私も結構好きだった。ツフル人の名を聞いただけで「あ、ここドラゴンボールの世界なんだな。」と理解する程度の知識もある。

ツフル王の城には私と同型のマシンミュータントが多数いた。皆髪の毛が金髪であること以外は私と同じ、咲夜さんそっくりだ。

なぜ私だけ銀髪なのかというと、私は他の量産型の召し使いマシンミュータントとは少し違うらしい。

私は王の身を守るボディガードとしての役割も持っていた。そのため、私には家事能力に加え、ツフル人の科学力の粋を集めた戦闘力も兼ね備えている。そのおかげで私には原作の咲夜さん同様、「時間を操る程度の能力」が備わっている。ブルマも未来の人造人間のせいでめちゃくちゃな世界でタイムマシンを造り上げたので、宇宙でも有数の科学技術の持ち主ツフル人にはこのくらい朝飯前なのだ。そう考えるとブルマって本当凄いな。一人でタイムマシン造り上げたって。あの人本当はツフル人なんじゃないだろうか？

そしてもう一つ、私には秘密がある。私は”不死身”だ。これは比喩でも何でもなく私は”不死身”だ。私の体は「形状記憶セラミック細胞自己修復型」という難しい名前の細胞でできている。細胞の一つ一つが自分達の配列を覚えていて、バラバラになって

も元に戻り、もし失われた細胞があっても他の細胞が失った細胞を再生するというチート能力だ。とどのつまり、もし私がベジータとかの気功波で消し飛ばされてもさながら魔人ブウのように甦ることができるのだ。おまけに古くなった細胞は次々と新しくなるので歳をとることもない。

どう考えてもチートですね本当にありがとうございました。

ツフル人達も私がこの機能を問題なく発揮した際大喜びだった。なんでも「形状記憶セラミック細胞」はとっくの父ちゃんにできていたのだが、それに自己修復能力をプログラムすることが非常に難航していたらしい。これができれば不死身の戦闘マシンミュータントが大量生産できて、ツフル人は未来永劫安泰になるのでツフル星中のツフル人で研究を重ね、ようやく成功した第1号が私ということだ。せっかく成功した初号機を国王に献上する辺り、ツフル星の治安の良さが伺える。

よーし、これでツフル人の将来は明るい！いっちょ大量生産やってみっかぁ！とツフル人が意気込んでいた矢先、サイヤ人達が攻めいって来た。

サイヤ人達はツフル星が満月の時を狙ってきて、ツフル人は苦戦、というより一方的な虐殺を強いられた。いくら科学力が発達したツフル人とはいえ、大猿化した大勢のサイヤ人にはとても敵わなかった。もちろん星一番の戦闘力を持つ私も戦ったのだが、まるで歯が立たない。不死身の体のおかげで死への恐怖はなかったものの、平和に生きて

きた日本人にいきなり星の命運をかけた戦闘などできるはずもなかった。
　こうしてツフル星はサイヤ人によってたった数日で滅ぼされた。私のような不死身のマシンミュータントがもっといれば勝てたかもしれないのに、ツフル人はさぞかし無念だろう。
　ツフル人は私が転生してから初めて会った人達だった。当然私は誰もいなくなったツフル星で涙を流して泣いた。そんな私の腕の中には、優しく家事を教えてくれた先輩マシンミュータントの残骸。ドラゴンボールの世界は、現実世界よりも弱肉強食だ。
　ツフル星は惑星ベジータと名が変えられ、私は王城の地下室に幽閉されることとなった。ツフルの科学力による私の戦闘力はベジータ王も上回る程で、そのうえ不死身で殺すことのできない私をベジータ王は危険視したのだ。
　そのまま数ヶ月程、食事も与えられぬまま幽閉されていた。そしてある日、やたら外がうるさくなった。誰かの悲鳴も聞こえるし、振動がこの地下にまで伝わってくる。私はなんとなく理解した。フリーザだ。多分サイヤ人はフリーザと戦っているんだ。
　そしてその日から数日後、なんとフリーザ様が私に会いにいらっしゃった。前世では紙の上の存在だったフリーザだが、こうして面と向かってみると凄い威圧感だ。背丈は私のほうが高いはずだが、まるで巨人と対峙しているかのように錯覚してしまう。
　さすが戦闘力５３万は格が違うぜ。

そしてフリーザは私をフリーザ軍にスカウトしてきた。ここで究極の選択に迫られる。ここでＮｏと答えれば私はこのまま地下室へ幽閉され、そのまま惑星ベジータと共に宇宙の塵になるだろう。かといってＹｅｓといえばこれから日本の犯罪が可愛く見える程の悪事に身を染めることとなる。そしてナメック星あたりで悟空かベジータに成敗されることになる。

どっちにしたってバッドエンドだ！もはや選択の余地ねぇ！

とはいえ、このまま幽閉されているのも嫌なので私はフリーザのスカウトを受けることにした。どうせ悪事をしたって死なない私は永遠に地獄へ行くことはない。むしろやってやろうじゃないか！殺人？強盗？惑星破壊？何でもござれだどんと来い！前世では小心者の私だが、今の私は十六夜咲夜だ！怖いものなど何もない！

フリーザが私の名前を聞いてきたので電子脳にプログラムされている製造番号（ちなみに製造番号は私の左肩に書いてある）を言ったら「呼びにくい」と言われてしまったのでそのまま”十六夜咲夜”と名乗った。

前の名前を忘れたわけではないが、これから悪事をするのにその名前を名乗りたくなかった。咲夜さんには申し訳ないがこれから私は”十六夜咲夜”だ。他の誰でもない。

こうして私はフリーザに連れられ、暗い地下室から外へ出た。

原作前、無印編・4

◆

フリーザは咲夜を惑星フリーザへと連れ帰り、食事を与え回復させた。もともと不死身なだけあって回復力は凄まじく、咲夜はたった数日で完治した。

回復してみれば咲夜はますます美しかった。ただでさえ綺麗だった銀髪は回復したことでハリとツヤが増し、青い瞳も強い光が宿っている。

充分に回復した咲夜は現在フリーザの玉座の前で跪いている。

「では咲夜さん。あなたの戦闘力を見せてもらいましょう。ザーボンさん。」

「はっ。」

ピピピピピピ……

フリーザに指示されたザーボンがスカウターで咲夜の戦闘力を測りはじめた。無機

質な電子音が部屋に響く。
「こっ……これは!!」
「どうしました?」
「故障だとは思いますが……この者の戦闘力は、３００００です。」
「なにっ!?」
ザーボンが告げた結果にドドリアも驚愕の声をあげる。戦闘力３００００とはベジータ王はおろか、フリーザ軍エリート戦士と言われるキュイや、自分やザーボンを上回る力なのだ。それだけに信じられない。スカウターの故障だと思ったドドリアも自分で計測してみるが結果は同じ。スカウターの画面には間違いなく３００００と表示されていた。
「ほっほっほ。そうですか。やはり私の目に狂いはなかったようですね。さすがはツフルの科学力と言ったところでしょうか。咲夜さん。あなたは不死身の肉体だけではなく、優秀な戦闘力も兼ね備えているのですね。すばらしいです。」
「……勿体なきお言葉。」
「フリーザ軍に入って間もないあなたですが、あなた程の人材を劣兵として使うのは勿体ないですね。もう少し上の位を与えてもいいかもしれません。」
フリーザは別として、この宇宙に万を越える戦闘力の持ち主は結構少ない。万を越え

る戦闘力とは、その気になれば惑星一つを破壊できるほどの力だ。そんな強力な力の持ち主がそうそういては宇宙のバランスが崩れてしまう。

　だからこそフリーザは咲夜のような人材は積極的にスカウトする。彼女のような優秀な人材を自身の手元に置いておけば、自軍の強化だけではなく、自分に逆らう危険因子を減らすことにもなる。そして優秀な者にはそれなりの地位も与える。それがフリーザのやり方なのだ。

「しかし、戦闘力の数値だけであなたを昇格させるわけにはいきませんからね。少しテストをしてみましょう。」

「はい。」

「この惑星フリーザからおよそ１００光年程の位置にドライヤ星という星があります。その星は我が軍に物資を提供していただいてる星なのですが、今少々荒れてるみたいでしてね。国民による革命が起きているようなのですよ。ドライヤ王はその革命を抑えきれず、私に救援を求めているのですが、私は少し別件で手が放せません。そこであなたの初仕事です。わかりますね？」

「……はっ。了解いたしました。」

「ほっほっほ。とてもいい返事ですね。では行ってきなさい。宇宙船は確か倉庫に丸型のものが余っていたはずです。」

「はっ。失礼します。」
そう言って咲夜は立ち上がり、フリーザに深い礼をして部屋から出ようとする。
「おい！スカウターを忘れてるぞ！」
「ご安心くださいドドリア様。搭載済みです。」
咲夜がスカウターを忘れていることに気づいたドドリアが叫ぶが咲夜は振り返って自分の右目を指さした。咲夜は戦闘マシンミュータントとして開発されたため、スカウターのような「戦闘能力数値化装置」は標準装備なのだ。さらに、右耳につけたイヤリングでスカウターとの通信も可能である。
「では行ってまいります。」
咲夜はそう言って部屋を後にした。

原作前、無印編・5

◇

無数の星々が輝く漆黒の宇宙。ひとつの丸型の宇宙船がその闇を切り裂き飛んで行く。

私が惑星フリーザを出発してから大体6時間。今回の目的地であるドライヤ星が見えてきた。色は木星と似たり寄ったりの、惑星フリーザよりも小さい星だ。ドライヤ星は星が一つの国として成立しているような星だからこれくらい小さいほうがちょうどいいのだろう。

ドォーン！と音をたてて私の宇宙船がドライヤ星の荒野に着陸する。降りてみると宇宙船の周りには半径3メートル程のクレーターができていた。

「さて、まずはこの星の王にご挨拶と行きますか。」

私が電子脳からE―13回路に接続し、右目の「戦闘能力数値化装置」を起動させる

と南西の方向に無数の高い戦闘力が集まっていた。恐らくこれが反乱軍だろう。所変わって北東には一つの低い戦闘力を囲む、高いが反乱軍よりは少し見劣りするたくさんの戦闘力。こっちが国王軍か。

「では、行きますか。」

そう呟き、私はその場から飛び立った。

◆

「お前がフリーザ軍から派遣されてきた兵士か?」

「はい、お初にお目にかかります。十六夜咲夜と申します。」

国王の城は、はっきり言って趣味の悪いものだった。いかにも金にものを言わせましたよと言わんばかりの金の装飾。しかも無駄にでかいし、外だけならまだしも城の中までキンキラキンだ。人の趣味にあまりとやかく言いたくないのだが、本当に趣味が悪い。東方の紅魔館の真っ赤なデザインも悪趣味だが、まだあっちのほうが好感を持てる。

そして私は今、これまた趣味の悪いシャンデリアがぶら下がる王の部屋にて玉座でふんぞり返るドライヤ王に礼をしている。私が自己紹介を終え、頭を上げると国王はふんっと不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「フリーザめ、我が国から物資を大量に供給しているというのにこんな雑魚をよこしおって！」

なんともまあ礼儀のなってない王である。ベジータ王ですらそのへんはちゃんとしているのだが。この世にベジータ王より失礼な王が存在したとは驚きである。まあ、パッと見てもふくよかな、悪く言えばデブな王だ。きっと甘やかされて育ったわがままおぼっちゃまなんだろう。

「まあ、せっかく来たのだ。ワシの夜の相手でもしてみるか？」

「申し訳ありません。私のこの身はフリーザ様に捧げております故、お断りさせていただきます。」

私の体を下碑た目で舐め回すように見て笑う国王の誘いを私は極力懇切丁寧に断る。仮にも革命が起きてるのに何考えてんだとぶん殴ってやりたい所だが、そこはフリーザ様の顔を立てるために根性で耐える。

「ふんっ！使えないうえに無礼なやつだ！反乱軍共は明日にこの城に到着するだろう。それまでに戦闘準備でも整えておけ！」

「承知しました。」
私は国王に軽く礼をして王の部屋を後にする。そのまま国王軍の兵士を観察しながら城を歩いてみたが、どいつもこいつも訓練不足なのが見てとれる。王の絶対的権力に甘えてきた結果なのだろう。だからこそこういう時に収集がつかなくなる。
城から出た私は再び右目の装置を起動させ、反乱軍の位置を確認する。そして私は王城から飛び立った。

▼

反乱軍を訪れた私は現在、剣や槍といった武器を向けられている。いきなり正体不明の存在が王城の方向からやってきたのだから当然の反応か。
「おまえ!何者だ!」
赤い髪で鎧を纏い、姫騎士という言葉がぴったりな女性が私に殺気を向けながら聞いてくる。恐らく彼女が反乱軍のリーダーなのだろう。一際戦闘力が高い。
「私はフリーザ軍所属の十六夜咲夜と申します。今回、国王からフリーザ軍への救援を

受けましたので派遣されました。」
「なにっ!?フリーザだと!?……ちっ！国王め、そこまでするか……。」
　私がフリーザの名前を出すと彼女は冷や汗をかいて驚く。フリーザの名は宇宙的に有名らしい。仲間とゆっくり私への対策を練りたい所だろうが、私はここへ来た目的を果たさなければならない。
「あなた達はなぜ反乱を起こそうと思ったのですか?」
「なぜ…だと?あれを見てみろ!!」
　そう叫んだ彼女が指さしたほうを見ると医療班のテントらしきものがあった。彼女の先導されて中に入るとそこには病気で苦しむ子供達や、飢餓に苦しむ子供達にわずかなパンを与える反乱軍の姿があった。
「あの王は!国民を自分の都合のいい道具としてしか見ていない！こんなにも苦しむ子供達がいるのに!あいつはなんの救助もせず!私利私欲のためだけに権力を行使する！こんなことが許されるはずがないだろう!!」
　……なるほど。典型的な革命である。悪の王の倒し、自由と平和の国を築こうとしているのか。
「この子達だけじゃない！このドライヤ星にはまだまだ苦しんでいる人が大勢いるんだ！これを見て何もしないわけにはいかないじゃないか!!」

そう叫ぶ彼女の目には信念が宿っている。私なんかでは読み取ることもできない強い、それでいて濁りのない信念が。彼女は本気だ。

ここで普通の人間は戦うのは良くないよとか、話し合いで解決しようなんて言うと思うが私は彼女を止めやしない。話し合いで解決するなら革命など起きやしないのだ。子供のケンカを例にあげると分かりやすいと思うが、話し合ってダメだったからケンカが始まるのだ。戦争も同じで、両国が話し合ってそれでもまとまらないからよし戦争だとなる。

とはいえ、私も鬼ではないので少しくらい彼女達に援助するのもいいだろう。私は「時間を操る程度の能力」で時間と密接な関係にある空間を操り、宇宙船に置いてある白いサンタクロースの袋を取り寄せる。

「?それは何だ?」

「惑星フリーザから持ってきた私の食糧です。3、4日分程しかないので足しにならないと思いますがどうぞ。」

「!?いいのか!?」

「ええ、一応私は食べなくても生きていけますから。」

私から食糧を受け取った彼女は本当に嬉しそうに笑う。きっと彼女は国民が大好きなのだろう。純粋だ。私のような人間には眩しすぎる。

「ありがとう咲夜！さっきは悪かったな！そうだ！まだ名乗ってなかったな！私はリースだ！」
「どういたしまして。それではリースさん。また。」
　私は彼女に礼をしてその場から飛び去った。あとは彼女の頑張り次第だ。私はフリーザ様の命令に従うまで。

△

　翌日、反乱軍は国王の城に到達した。しかし、国王軍はすでに迎え撃つ準備を整えており、奇襲をかけるつもりが完全に待ち伏せをくらってしまった。
　兵力では国王軍のほうが分があるので、反乱軍が勝つには奇襲をかけるしかなかった。そのため待ち伏せをくらったのはそうとう痛い。
　さらには国王軍にはあの宇宙を支配するフリーザ軍から派遣されたという戦士咲夜がいる。反乱軍は完全劣勢であり、兵士達の戦意も下がっている。
「咲夜……。」

前線で戦うリースは咲夜の名を呟くも、彼女は国王の側に立っているだけ。彼女が味方になってくれればどんなに頼もしいことか。そんな叶わぬ願いをした時、咲夜が動いた。

前線で国王軍を払いのけるリースを鬱陶しく思った国王が、咲夜にリースを消すように命じたのだ。命じられた咲夜はリースの元へゆっくり飛び、降り立つと右手にエネルギーを溜めはじめた。

「さ、咲夜…。頼む…やめてくれ…。私達に力を貸してくれ…。」

「……申し訳ありません。フリーザ様の命令ですので。」

幾多の戦いを経験してきたリースにはわかった。咲夜が溜めているエネルギーを喰らったら自分は間違いなく消え去るだろう。そうなってしまえば、司令塔を失った反乱軍はたちまち敗けてしまう。

しかし、咲夜はやめる気などさらさらない。自分は十六夜咲夜で、フリーザの忠実な従者なのだから。そして咲夜はまもなくエネルギー波を放った……。

後方へと。

原作前、無印編・6

◆

「「ぐわあぁぁぁぁ!!!」」

咲夜が後方へ放ったエネルギー波は、リースが咲夜に消されるのをニヤニヤしながら見ていた国王軍の兵士を大量に殺害した。国王にもその余波が来たが、たくさんの兵士が肉の壁となり、かろうじて生きている。

「……え？」

思わずリースは呆けたような声を出す。そんな彼女を尻目に咲夜はくるりと振り返り、しぶとく生きているドライヤ王へコツコツとゆっくり歩み寄る。

「が、がはっ……。貴様……どういう……つもりだ……。」

生きているとはいえ重傷な王は憎々しげに咲夜を見る。

「低能なあなたにはそんなことも分かりませんか？」
「な……に…!?」
　咲夜は右手を国王へと突き出し、掌に虹色に輝くエネルギーを溜め始める。
「あなたはもう用済みなのです。よって、この十六夜咲夜があなたを削除します。」
「ふっ、ふざけるなっ……!!ワシが…お前達フリーザ軍に……どれだけのっ……!!」
「確かにあなたからはたくさんの鉄や銅をいただいておりますが、年々その質は落ちていっています。にもかかわらず、あなたは城を趣味悪く着飾ったり無駄に脂肪をつけたり、そんな愚か者は必要ありません。」
「っ……悪かった……!改善…するっ…!!だから……助け」
「もう遅い。誰が上かも分からなくなった愚か者め。その罪、身をもって償うがいい。『マスタースパーク』。」
　ゴウッ！と凄まじい音をたてて彼女の右手から放たれた虹色のエネルギー波は先程のものとは比較にならない威力を発揮し、王はおろか、背後の王城に大穴を開けてしまった。しかも、それほど高威力のエネルギー波を放ったにも関わらず、咲夜はまったく息を切らさず、悠然と立っている。
　やがて彼女はリースのほうへ振り向き、微笑みながらこう呟いた。
「リース。ここから先はあなたの仕事です。精々頑張りなさい。」

「あ…ああ！みんな！あとは兵士だけだ！いくぞっ!!」
「「「おぉーーー!!」」」
リースが掻き立てると反乱軍の士気はあがり、瞬く間に国王軍を押していく。完全に形勢が逆転した。その前に王はもう倒されたのだ。革命はもう成立しているようなもので、国王軍にもはや戦う気力すら残っていない。
まもなく、ドライヤ星の革命は成立した。

△

ドライヤ星での仕事を終え、無事惑星フリーザへと帰還した咲夜だが、フリーザの玉座の前でフリーザ軍兵士に取り押さえられていた。理由は言わずもがな、ドライヤ星での勝手な行動についてだ。国王の救援に行ったはずなのに、あろうことか革命の手助けをしてきたのだ。しかも王を殺したのは咲夜。当然のことである。
「勝手なことしやがって！」

「フリーザ様！こんなやつ極刑にしましょう！」
「ドライヤ王は我々の大切なクライアントだぞ！」
兵士達の咲夜への罰を望む声にフリーザは……
「ふふふ、あーっはっはっはっは!!」
大声で笑い始めた。見れば側近のザーボンとドドリアも薄い笑みを浮かべている。これには兵士達も驚いた。
「フ、フリーザ様？」
「ふふふ、すみませんねぇ。咲夜さんがあまりにも優秀すぎてつい笑ってしまいましたよ。」
「はい？」
フリーザの言葉に兵士達は困惑する。軍の重要な取引相手のドライヤ王を殺した咲夜が優秀？わけが分からなかった。
「一応聞いてみましょう。なぜドライヤ王を殺したのですか？咲夜さん。」
「フリーザ様の命令だったからです。」
フリーザに対する咲夜の返答に兵士が「何だと!?」と怒鳴るがフリーザが「お黙りなさい。」と止める。
「フリーザ様の命令を聞いた時、私はまずそこで妙だと感じました。物資を提供してい

ただいている重要なクライアントに関する任務ならば、新参者の私ではなく、ザーボン様かドドリア様に命じるのではと思ったのです。」
「ほう……。」
「そして私は出発前、ドライヤ星について調べてみたのですが、ドライヤ星からの物資は年々と質が下がっていることが分かり、フリーザ様が救援するメリットなどない星だと感じました。」
「ふふふ、なるほどなるほど。」
「この時点でフリーザ様の命令はドライヤ王を救援することではなく、その逆だと考え、最後の確認として実際に国王、反乱軍ともに面会をして私の考えは正しいものだと確信しました。」
「そうですか。ふふふ…。」
　咲夜が話している途中、ご機嫌そうに相槌を打っていたフリーザは話が終わるとパチパチと手を叩いた。
「素晴らしい！本当に素晴らしいですよ咲夜さん！よくぞ私の真意を読み取ってくれました！まさに理想の部下像ですね！」
「光栄でございます。」
　フリーザの称賛に咲夜は胸に手を当て、綺麗な礼をする。

「あなたはフリーザ軍の最高司令官にしようと思っていましたが、もはやそれすらも霞んできますね。」

フリーザは咲夜に右の人差し指を向けてこう宣言した。

「十六夜咲夜さん。あなたは私の専用召し使いとなりなさい。いいですね?」

「当然です。この十六夜咲夜、フリーザ様のためならば難儀難問無理難題、如何なる命令も遂行してご覧にいれましょう。」

フリーザの指名に咲夜は、それはそれは美しい敬礼をするのだった。

原作前、無印編・7

◇

「フリーザ様、紅茶です。」
「どうも。」
私がいれた紅茶をフリーザは満足そうに飲む。先輩マシンミュータントにスパルタで教えてもらった従者としての家事能力は充分に発揮されているらしい。
時間とは早いもので、私がフリーザの専用召し使いとなってからもう一週間がたった。ドライヤ星での任務は内心ドキドキしていた。フリーザが何か引っかかるような、思わせ振りな言い方をしていたので、急いでドライヤ星について調べて正解だった。ツフル王もあんな感じで時々私達を試すようなことをしていたので、なんとなく察することができた。

ツフル王にこき使われた経験が役に立った。やはり人生とは経験である。私、人じゃないけど。

「これは……咲夜さん。茶葉変えましたか？」

「はい。惑星フーリに生育しているアムサという茶葉です。」

「ほう、香りのいい紅茶ですね。」

「ありがとうございます。」

フリーザ専用召し使いの仕事は基本的にフリーザのサポートをするだけだ。軍のトップであるフリーザの書類仕事を片付けたり、こうやってフリーザに紅茶やワインを振る舞ったり。そんなことを朝早くから夜遅くまでやる。

ちなみに私は惑星ベジータの、あの地下室で寝泊まりしている。フリーザが最高の部屋を提供してくれると言っていたのだが、私はそれを丁重にお断りした。

いくら実力を買われたとはいえ、新入りの私がそこまで上級の扱いを受けるのは居心地が悪かったし、ろくな思い出がないとはいえ、あの地下室には数ヶ月もお世話になったのだ。愛着だって湧いてくる。

それに惑星ベジータは、私の今世での故郷は後にフリーザによって消されてしまうのだ。今のうちに故郷の空気を噛み締めておいたほうがいいだろう。

ドライヤ王を消し去った『マスタースパーク』。あれは昔ノリで開発した技だ。戦闘

マシンミュータントらしく、私には体内のエネルギーを凝縮して体外へ放つことで攻撃する、これぞドラゴンボールという機能が備わっていたので、「できるかなぁ」なんて軽い気持ちでやってみたらまさかの大成功。先輩マシンミュータントにくしゃくしゃと頭を撫でられた。

あの先輩には本当にお世話になったなぁ。もしドラゴンボールを使って願いを叶える機会があったらぜひとも甦らせてあげたいが、多分無理だろう。原作でもセルゲーム後にセルに殺された人々を生き返らせてくれという願いで１６号は復活しなかった。きっと人が造ったロボットは対象外なのだろう。神様のくせに差別すんなよ。

ちなみのちなみに私の体内のエネルギーと言ったが、少し語弊がある。私は宇宙に満ちる「宇宙エーテル」という粒子をエネルギーにして動いているので、厳密に言えば私のエネルギーとして吸収された宇宙エーテルの力だ。宇宙エーテルが何なのかは難しすぎて理解できなかった。不思議パワーとでも捉えていれば大丈夫だろう。

「フリーザ様！ご報告します！」

「どうぞ。」

フリーザの部屋の扉が開き、フリーザ軍一般兵が入ってくる。一般兵はフリーザの前まで来ると敬礼をして話し始める。

「たった今、ギニュー特戦隊が惑星ションの征服を終え、帰還しました。」

「そうですか、分かりました。すぐここへ来るよう伝えなさい。」
「はっ！」
一般兵は礼をしてフリーザの部屋を後にした。
「フリーザ様、ギニュー特戦隊とは？」
原作知識で知ってはいるが、会うのは初めてなので一応聞いておく。
「咲夜さんは会ったことがありませんでしたね。フリーザ軍の超エリート部隊ですよ。少しクセがありますが……。」
フリーザが苦笑しながら私の質問に答えてくれる。表情から察するに彼らの相手をするのは苦手なようだ。
ギニュー特戦隊かぁ。個人的に私は彼らのあのテンションは好きだ。数ある敵キャラの中で彼ら程憎めない敵キャラはいなかった。戦隊ものに憧れる子供のようで、微笑ましいとまではいかないが、和むものはある。
早く彼らに会いたい。まぁ、唯一心配なのは私の「時間を操る程度の能力」はグルドのお株を完全に奪ってしまっていることか。

原作前、無印編・8

▽

ここはフリーザの部屋。現在この部屋にはフリーザと咲夜、そして任務を終えて帰還した5人の戦士がいる。部屋は謎の静寂に包まれている。そして……

「リクーム！」
「バーター！」
「ジース！」
「グルド！」
「ギニュー!!」
「「みんな揃って～!!」」
ババッ!!

「「ギニュー特戦隊!!」」

5人それぞれが特徴あるポーズを決め、最後は5人全員でポーズを決めた。本人達は「決まった!」と言わんばかりの満足気な表情だが、フリーザは微妙な顔をしていた。

そこにパチパチと拍手が鳴り響く。

「素敵なポーズですね。皆様の絆があってこそのポーズだと思います。」

咲夜だった。意外な人物の称賛にフリーザも思わず「え!?」みたいな表情をしてしまう。

「おぉ! 分かってくれるか!」

「ありがとう!!」

「お前いいやつだな!」

「美しいポーズだろ! 隊長が考えてくれたんだ!!」

咲夜はあっという間にギニュー特戦隊のメンバーと打ち解けてしまった。咲夜とギニュー特戦隊は馬が合わないだろうなと思っていたフリーザは唖然としてしまう。が、すぐに気を取り直し、コホンッと咳払いをする。

「ギニュー特戦隊の皆さん。惑星ションの征服、ご苦労様でした。」

「ありがとうございます。」

フリーザの労いの言葉に隊長のギニューが代表して礼をする。

「しかし、一週間ですか。確かに惑星ションはここから遠く、片道で2日はかかってしまいますが、それを踏まえても、あなた達なら5日で済むと思っていたのですが…。」
「あ……いや、あの…それはですね…。」
　フリーザに対するギニューの反応はどうも歯切れが悪い。不審に思っていると別の所から声がかかる。
「こいつですよフリーザ様！バータのやつが急に惑星ドルの限定フルーツポンチが食いたいって言うから！」
「あっ！グルドお前!!お前だって2杯も食ったじゃねぇか!!」
「なにを！それを言うならリクームなんて5杯も食ったんだぞ!!」
「何言ってんだ！ジースだって……!!」
　グルドがバータを指さして密告するとそれを皮切りに隊員達が言い合いを始めてしまった。軍のトップフリーザの前であるというのに。
「まったくこの人達は……。」
　フリーザは思わず頭を抱えてしまう。フリーザがギニュー特戦隊を苦手としている理由がこれだ。自由。そう、彼らは圧倒的自由なのだ。
　わけの分からないファイティングポーズをするだけならまだしも任務の途中にフルーツポンチとは…。

普通なら何かしらの罰を受けるべきなのだが、任務はきちんとこなしてくるので怒るに怒れない。ある意味サイヤ人以上に扱いづらい者達なのだ。

今だ言い合いを続ける隊員達にフリーザ同様呆れ顔のギニューはふと気がついたようにフリーザへ尋ねる。

「ところでフリーザ様、その者はいったい…？」

「あぁ、そうでしたね。咲夜、自己紹介なさい。」

「はい。この度フリーザ様の専用召し使いに就任いたしました。ツフル製マシンミュータント、十六夜咲夜と申します。」

流れるような自己紹介の後、咲夜はペコッと礼をする。そんな咲夜にギニューは笑いながら手を差し出す。

「おぉ、そうか。俺はギニュー特戦隊隊長、ギニューだ。よろしく頼む。」

「えぇ、こちらこそ。」

咲夜は差し出されたギニューの手を握り、握手した。

「では、フリーザ様。失礼します。こら！お前達！いつまでやってるんだ！いくぞ!!」

「「はい！隊長!!」」

ギニューはフリーザに一礼して、依然として言い合いをやめない隊員達に一声かけて部屋を去ろうとする。するとそこへ咲夜が「ん？」と声をあげた。

「どうしました?」
「あ、いえ。ギニュー特戦隊の皆様?あの、ジャケットにマークは描かないのですか?」
　咲夜が小首を傾げながら聞いた疑問に隊員達は自分の戦闘ジャケットの胸元を確認する。そこには原作に描かれていたギニュー特戦隊のマークがなかった。そしてジースが困った笑みを浮かべ、頭をかきながら説明する。
「いや～、実はみんなでギニュー特戦隊のマークを考えてるんだけど、なかなか決まんなくて…。」
　すると咲夜が「でしたら…。」と、どこからともなく紙とペンを取り出し、サラサラと何かを描く。そして「こんなのはどうですか?」とギニューに差し出した。それを他の隊員達も覗きこむ。
　そこには原作のギニュー特戦隊の、オレンジと青を基調とした、いかにもなレンジャーもののマークが描かれていた。
「おぉーー!!」
「隊長!これいいんじゃないっスか!?」
「うむ!何とも言えないが、俺達らしさがこれでもかと伝わってくるマークだ!」
　そんなマークに隊員達は大絶賛だ。その反応を見て満足気に微笑む咲夜を、フリーザは珍しいものを見たというような表情で眺めていた。

原作前、無印編・９

▽

惑星フリーザのとある施設。ここでは、戦闘用のインスタント兵士「サイバイマン」を養殖している。

サイバイマンはその名の通り、土に種を埋めて水をかければ数秒で誕生する兵士であり、戦闘力は１２００程度。全身緑色で化け物のような姿をしていて、人語を話すことができないが、一応命令を理解する知能はある。

「こんにちは。」

「あ！咲夜さん！今日もですか？」

「ええ、あの子達に会いに来ました。」

そんなサイバイマン養殖場に一人の人物が訪れる。咲夜だ。フリーザ軍に入ってか

らわずか数日でフリーザの専用召し使いにまで出世した咲夜に、養殖場を担当している鳥型の宇宙人は立ち上がって礼をする。

そんな対応に困ったような笑みを浮かべる咲夜の手にはたっぷりと水が入った大きめのジョウロが握られていた。「失礼しますね。」と声をかけて咲夜は扉を開け、養殖場の奥へ入っていく。

その部屋には、大型のプランターが数個並べてあるだけで他は何もなかった。咲夜はそのプランターに歩み寄り、「出ておいで。」と声をかける。すると……

「「「ギギィ!」」」

プランターからたくさんのサイバイマンが飛び出し、咲夜に抱きついた。

▼

私がサイバイマンの養殖場を訪れるのは、もはや朝の習慣になってしまった。最初は興味本位で訪れただけなのだが、必死に戦闘訓練をする彼らが可愛く思えてしまい、部活のマネージャーのように肥料を加えたおいしい水を差し入れしたのが始まりだ。

それから私は朝、惑星ベジータから出勤した後まず最初にここを訪れる。気分は花の水やりだ。

「ギギィ♪」

「ギィ～♪」

私がジョウロで水をかければ、サイバイマン達は気持ち良さそうに目を細める。サイバイマンというだけあって彼らの体は植物と大差ない。日の光を浴びて水を吸えば彼らはすくすく育つ。

「ギギッギ～♪」

一匹のサイバイマンが「もっと。」と言わんばかりに私の足にすり寄ってくる。私が水をかけてやれば「ギィ～♪」と嬉しそうに振る舞う。

やばい、かわいい。

前世で原作の漫画を呼んだ時は正直サイバイマンは苦手だった。気味悪い容姿など、私はあまり好きになれなかった。

しかし、これを見たらそんなのは吹き飛んでしまう。可愛い。とにかく可愛い。私になついてくれる彼らが愛しくて仕方ない。

だが、可愛がってばかりもいられない。私は彼らを一人前のサイバイマンに育てるべく、色々教えなければならない。

「いつもの、お願いします。」
『はっ！了解しました！』
　私が部屋の隅の監視カメラへ声をかければ、養殖場担当の宇宙人の返答がスピーカーから聞こえてくる。そしてしばらくすると檻に入れられた虫がそのまま人に進化したような宇宙人が運ばれてきた。
　彼らはフリーザ軍が征服した星の原住民で、いわば捕虜として捕らえている。そして私はいつも彼らを実験台にサイバイマンに敵の殺し方を教えるのだ。
「見ててね。」
　ビッ!!
「ギエッ!!」
　私がさながらフリーザのデスビームのように指先から光線を発射し、虫型宇宙人の眉間を貫くと少し声をあげて事切れてしまった。
「いい？みんな。心臓を撃ち抜いても生き物は数秒くらいは生きていられるの。その間に自爆なんかされて、大勢の味方がやられることもありえる。これは分かる？」
「「ギィ!!」」
「うん、いい返事。それでね、生き物を即死させるにはこうやって脳幹を撃ち抜けばいいの。そうすれば再生能力を持つ例外を除けば、どんな生き物も死んじゃうから。分かっ

た？」

「「ギィ!!」」

「よし、じゃあやってみて。」

私ができるだけ優しく、分かりやすく教えるとサイバイマン達は残りの虫型宇宙人に一斉に襲いかかった。彼らは私のように細い光線を撃つ技術はないので、その太いツメのような指で宇宙人の脳幹を貫いている。

善人なら私がやっていることを「残酷だ！」とか「なんてひどいことを！」なんて責め立てることだろう。だが、私がやっていることは別段おかしなことではない。似たようなことを人間だってやっている。

例えば昔と比べれば随分進歩してきた医療。いい薬をつくるのに人間は試作品をマウスなどの動物に注射し、その効果や副作用を見る。

ゴールデンハムスターやウーパールーパーなど、普段何気なく呼んでいるその名前も、捕まえてきてはひどい虐待のような研究を重ねてつけられたのだ。

これらに比べれば私がやっていることは可愛いものだ。特に苦しむことなく、サイバイマン達に一思いに殺してもらえるのだから。

「ギギィ！」

「ギッ！」

虫型宇宙人の青紫色の血を浴びたサイバイマン達は、殺し終えれば私の元へと駆け寄ってくる。普通の人間なら恐怖を感じるが、私はただ「可愛い」としか思えなかった。私はそんな彼らの頭を撫で、ご褒美として再び水をかけてあげるのだった。

原作前、無印編・１０

◆

原作ではあまりそういった描写はなかったため、意外かもしれないが、フリーザ軍での仕事は結構書類仕事が多い。私の１日の仕事の大半はこのデスクワークに持っていかれる。やはり全宇宙を支配する軍のトップともなるとそんじょそこらの会社とは比較にならない程の書類がまわってくるらしい。

そして今日の書類仕事は特に多かった。机の上に積み重なった書類が高いタワーをつくっており、いつ卓上雪崩が起きても不思議ではない状態だ。これをすべて今日中にやれというのだから無茶な話だ。

あまりにも多いのでフリーザやドドリア、ザーボンにも手伝ってもらっている。フリーザ曰く、毎年大体決まってこの時期に書類仕事が多くなるらしい。昨年まではフリーザとザーボン、ドドリアの３人で片付けていたので、今年は私がいる分幾分かマシ

なようだ。
　これでマシって……。フリーザも苦労してたんだな…。
　しみじみとそう思ってしまった。
「毎年のことですが、何とかならないですかね…。」
「ええ、やはり奴らは消してしまいましょうか？」
「そうだな、こちらの被害も出るだろうが、それでもこの仕事がなくなるなら安く見えてきたぜ。」
　フリーザが呟くとザーボン、ドドリアもそれに同調した。彼らが言う「奴ら」とはこのフリーザ軍とためをはっている「銀河防衛隊」のことだ。彼らはこの宇宙すべてを守り、全宇宙人に平和をお届けすることを企業理念にかがけた良く言えば正義の味方、悪く言えば偽善者の集まりだ。
　宇宙のすべてを守るなど、何とも勝手な思想である。そんなの迷惑でしかない。特にサイヤ人などからしたらたまったものではないだろう。戦闘ができなくなるのだから。はっきり言って私もそういった連中は嫌いだ。実際は余計なことをしているのにさも自分は善人かのように振る舞う。そしてそのことを指摘すると理不尽に怒りだしたり、こちらを呆れた顔で見てくる。
　自分が悪いことを自覚できない一番メンドくさいタイプだ。悪事をしていると自覚

している分、フリーザ軍のほうが可愛く見える。
そんな銀河防衛隊が毎年フリーザ軍に「悪事もいい加減にしろ」だの「宇宙はみんなのものだ」だのという気持ち悪いキャッチコピーとともに文句を送りつけてくる。その処理がこの書類仕事というわけだ。
銀河防衛隊はとある大きな惑星を居住としたやたら兵士の数が多い軍隊だ。悲しい思考を持った人が宇宙にはそんなにたくさんいるのかと思うと嘆かわしい。まあ、とにかく数だけやたら多く、フリーザは「面倒くさい」という理由でいつも放置している。まあ、多分さすがのフリーザもあんな奴らの相手はしたくないのだろう。
それをどう勘違いしたのか、奴らは自分達がフリーザ軍より上だと思っているらしい。だからこそ宇宙の帝王フリーザに文句を送りつけるなんて愚行ができるのだ。
そしてついに頭にきたフリーザが奴らを消すことを考え始めたようだ。これは私も今から身構えておいたほうがいいかもしれない。
「そういえば咲夜。」
「何でしょう?」
不意に私の向かいに座って仕事をしていたザーボンが話しかけてきた。
「惑星の征服を終えたサイヤ人のガキどもがまた惑星ベジータに帰って来たらしいぞ。」
「そうですか。分かりました。」

ザーボンからのお知らせを聞いた私は机から立ち上がる。一応私の分は終わっているので少し席をはずしても問題ないだろう。
「会いに行くのですか？咲夜さん。」
「ええ、すみませんフリーザ様、少し席をはずさせていただきます。」
「お前も物好きな奴だな。わざわざサイヤ人のガキに会いに行くとは。」
「戦い終わった戦士のケアは大切ですから。失礼します。」
私はフリーザに礼をしてその場を後にした。

原作前、無印編・11

▽

サイヤ人には階級が存在する。

まずは王族。これは現王のベジータ王と王子ベジータの二人だけだ。サイヤ人の頂点に君臨する存在で、代々サイヤ人を治めてきた。下級戦士のように星に送り込まれたりせず、そのへんの星を勝手気ままに攻めて戦闘力を高めていく。

次にエリート戦士。サイヤ人は生まれるとすぐ戦士の素質を検査される。その検査の結果が良かった者がエリートだ。彼らは下級戦士のように星に派遣されるが、比較的レベルの高い星へと送り込まれる。

最後に下級戦士だ。王族、エリート以外は全員下級戦士となる。彼らは検査での結果が悪い、いわゆる「クズ」であり、レベルの低い星へ赤ん坊の頃に派遣される。そして

その星の生物を全滅させ、惑星ベジータへと帰還。その後、自主的にトレーニングをし、厳しい試験に合格するとやっと戦士として働けるようになる。

一応戦闘力が上がれば昇格も可能であるが、下級戦士の戦闘力は２０００を越えていればいいほうで、エリート戦士にはほとんど敵わない。さらに下級戦士となった者は親からも見放されることが多いため、生き物が育つ上で必要な「愛」をあまり受けずに育ってしまい、成長の伸びが悪いことも災いしている。

星の征服を終えた子供が帰って来ても、以前なら誰も出迎えることはなかった。

しかし、今は違う。今はちゃんと一仕事終えた彼らを出迎えてくれる人がいる。

「みんな、お帰り。」

惑星ビュートの征服を終え、惑星ベジータに帰還したラディッツはボロボロの身体を動かし、その人物、咲夜へと飛び付いた。

▼

私が「お帰り」と声をかけると任務を終えたサイヤ人の子供達が一斉に私に駆け寄ってくる。こうしてみるとそのほとんどが男の子であり、女の子は一人、二人しか見られない。私に一番に飛び付いてきたサイヤ人は長髪だが、この子はラディッツだ。女の子じゃない。

サイヤ人が少数民族であるのは、戦闘で早死にすること以外に女性が極端に少ないこともあげられる。資料によればサイヤ人の男女比は4：1であるらしい。

それはそれとして、私はサイヤ人の子供達が任務から帰ってくると、時間があるときはこうやってお出迎えをしている。これは結構大事なことで、頑張った後に「お帰り」と言ってくれる人がいるだけで大違いだ。それにこの子達はまだ子供だ。誰かから情を受けることが必要なのだ。

サイヤ人は私達ツフル人の敵だ。ツフル星を滅ぼし、それを我が物とした憎き相手だ。もちろん私も彼らを恨んでいる。早くフリーザが惑星ベジータを消さないかなと毎晩寝る前に願う程だ。

でもツフル人を滅ぼしたのはベジータ王の世代であって、目の前で、無邪気かどうかはともかく笑うこの子達じゃない。

それを判断するくらいの冷静さはまだ残っている。そのおかげで私は何とか彼らの頭を優しく撫でることくらいはできる。

そうして２０分くらい彼らを愛でて、彼らが立ち去った後、誰かが私に話しかけてきた。

「いつもご苦労なことだね。ありがとうよ。」

その人物は、髪は黒髪のショートカットであり、戦闘ジャケットの下にレオタード型のアンダースーツを着た女サイヤ人、セリパだった。戦闘終わりだからか、彼女の戦闘ジャケットは少し傷がついていて、アンダースーツにも破れが見られる。

セリパはドラゴンボールファンなら誰もが知っているだろうバーダックの仲間であり、原作には登場しないが作中で唯一名前が分かっている女性のサイヤ人だ。

私がこうやって子供達のお出迎えをしている時に偶然出くわしたのがきっかけで少し仲良くしてもらっている。

一応彼女も私達ツフル人を侵略したベジータ王の世代なのだが、彼女は丁度その時チームの主戦力であるバーダックとトーマが負傷中だったため、戦いに参加していなかった。

もっとも、もしあの時彼女が戦闘に参加していたら今のような関係は築けていないだろう。ベジータ王同様、憎悪の的にしていたはずだ。

きっとここで銀河防衛隊の連中なら「憎しみは何も産まない」なんていうヘドが出る綺麗事を言うだろう。そんなことが言えるのは戦闘を知らない温室育ちのおぼっちゃ

まだけだ。世の中そんなに甘くない。

本当に憎しみが何も産まなければ戦争なんて起きやしない。

「それはそうとあんた、相変わらずだね。そのヒラヒラしたスカートだっけ？まだ着てんだ。私らみたいな戦闘ジャケットを着たらどうだい。」

セリパが私の服を指さしたので自分の服装を見てみる。原作の咲夜が着ているようなフリルがふんだんに使われたメイド服を着ていて、頭にはカチューシャ、腰には背中に大きなリボンがくるエプロンをしている。

「私は不死身ですから。そのようなジャケットで防御力を得る必要はありません。」

「そりゃそうだろうけどさ、動きにくくないのかい？」

「ええ、むしろ無駄な締め付けがない分、こちらのほうが動きやすいかと。」

「ふ～ん、まあ、人の趣味にあまりとやかく言わないけどさ。」

セリパは頭をかきながらそう言った。さすがは戦闘民族サイヤ人。オシャレといった概念はあまりないらしい。

「あ、そうそうセリパ。近々フリーザ様が銀河防衛隊を消そうと計画しています。いつでも出撃できるよう準備しろとベジータ王に伝えて下さい。」

「おっ！そうかい！あの連中は昔からうるさかったからね。そりゃいい！分かった！伝えておくよ！」

「お願いします。」
　セリパは私からの伝言に快く頷いてくれた。戦闘終わりだというのに拳を握りしめ、今からでも戦えそうだ。
「咲夜。」
　と思ったら急に神妙な顔つきになった。そしてセリパは私に一歩近づいて真剣な顔で囁く。
「あんた、まだ王城の地下で寝てるのかい？」
「はい。」
「気をつけなよ。ベジータ王はあんたを良く思ってない。どんなことをされるか……。」
「ご安心ください。どんなことをされても私は死にませんし、良く思ってないのは私も同じですから。」
　セリパは私を心配してくれたらしい。そのことに少し嬉しくなって笑いながら安心を促すとセリパはフッと笑って私から離れた。
「ふふっ、それを聞いて安心したよ。じゃあな！」
　そう言ってセリパは走り去った。私は彼女に手を振りながら考える。
　いつになるか分からないがフリーザは原作通りなら惑星ベジータとともにサイヤ人を滅ぼすだろう。サイヤ人が滅ぶのは大いに結構だが、その時にはセリパも殺されてし

まう。それは嫌だ。だが、セリパは女性だ。純血なサイヤ人を滅ぼすためには確実に消さなければならない。

私がサイヤ人に抱く思いは複雑である。

原作前、無印編・１２

◇

私が任務を終えたラディッツ達を迎えてから数日後、惑星フリーザにベジータ王とエリートサイヤ人数名が召集された。

よく見ればまだ髪がある若かりし頃のナッパの姿もある。この頃のナッパは髭も若干薄めで、顔だけ見れば何となくリクームに似てるなぁと感じるのは私だけだろうか。

閑話休題

なぜサイヤ人を召集したかといえば、銀河防衛隊のことである。とうとう奴らを滅するべくフリーザ軍は奴らの本拠地惑星ジスへと侵攻するのだ。そのメンバーを決める会議が昨日行われたのだが、本当なら星ごとドッカンと破壊すれば簡単なのだが、奴らが拠点を置いている惑星ジスはかなり良好な星であり、フリーザがぜひとも自分の惑星コレクションに入れたがっているのだ。

そうなれば私達は星を破壊せずに惑星ジスの生物を全滅させなければいけないのだ

が、何しろ惑星ジスは広い。とにかく広い。重力は惑星ベジータの三分の一程度だが、大きさは木星の約四倍程。そんな大きな星を破壊せずに生物を全滅させなければいけないなど面倒な話で、誰もやろうという者はいなかった。

そんな中、我らがフリーザ様はサイヤ人にやらせようと提案した。そういえばサイヤ人がフリーザ軍に入ってからまだこういった大きい仕事はしていない。そういった理由もあり、この件はサイヤ人にやらせることになった。

そして今に至るわけだ。フリーザは私が入れたワインを優雅に飲み、そんなフリーザの玉座から数歩下がって私、横にはザーボンとドドリア、そしてフリーザの前で跪くサイヤ人達という光景ができあがっている。

「というわけで、サイヤ人には惑星ジスの征服をお願いしたいのです。いいですね？ベジータ王。」

「……はい。」

フリーザの言葉に返事をするベジータ王は忠誠心など皆無であることがまる分かりだ。拳は震える程握られており、そもそもセリフに心がこもってない。ザーボンもドドリアも思わずため息をついてしまっている。

「よろしい。明日までに侵攻するメンバーを決めて私か咲夜さんに教えてください。まあ、あの星の平均戦闘力は知れたものですし、高くても２０００程度。下級戦士チーム

一つ二つで充分です。」
「了解しました。失礼します。」
そう言ってベジータ王とエリート戦士達は立ち去っていった。サイヤ人の態度の悪さにさすがのフリーザも不機嫌を隠せていない。
原作でフリーザがサイヤ人を滅ぼした理由が何となく分かる気がする。超サイヤ人のこともあるが、こういった不愉快さもサイヤ人が気に入らない理由だろう。
彼らはプライドが高い故に、目上の者に対する礼儀がまるでなってない。縦社会で生きる上で必須スキルのごますりがまったくできないのだ。漫画を読んでいるだけでは分からなかったが、実際それを目の当たりにするとその不快感がよく分かる。私でさえ不快に思うのだからフリーザはよっぽどだろう。
サイヤ人が、惑星ベジータが滅ぼされる日は思いの外近いのかも知れない。

原作前、無印編・13

▼

私は今、惑星ジスへと向かう宇宙船に乗っている。いつものような丸型ではなく、フリーザの大型宇宙船を二回り程小さくしたような中型宇宙船だ。惑星ジスへは日数がかかる。人数も人数なので今回はこれで行くことになった。

「おい！咲夜！もっと料理追加だ！こんなんじゃ足りねぇぞ!!」

「はいはい、今行きますよ。」

宇宙船の中央辺りで仲間と宴会騒ぎをしているバーダックが私に叫ぶ。今回の惑星ジス侵略に抜擢されたサイヤ人はバーダックのチームだ。彼の他にもトーマ、パンプーキン、セリパなどアニメで見た彼らが勢揃いしている。

さて、ここで皆さんは疑問に思っているだろう。サイヤ人にやらせるはずの今回の任務になぜ私がついているのかと。それは……

「さくや！こっちにもさっさともってこい！」
　バーダック達とは反対側で食べ物にがっつく子供、今年で四歳になるベジータぼっちゃまである。
「ベジータ王子、食べ物は逃げませんからもう少しゆっくり召し上がって下さい。喉につまりますよ。」
「ふんっ！くだらんしんぱいはいらん！うっ…!!」
「ほら言わんこっちゃない。しっかりしてください。」
　私はまだ小さいベジータを抱き上げ、顎を肩に乗せてポンポンと背中を叩く。父に似てなかなか生意気だが、まだまだ子供だ。
　ベジータ王が星へ帰り、メンバーの選別を行った際、真っ先にベジータが名乗りを上げたらしい。ベジータは前述の通り四歳になったばかりで、まだ他星を攻めたことがなく、御付きのエリートサイヤ人としか戦ったことがないという。それでも戦闘力は５００を越えていたので流石王子と賞賛してしまった。
　まあ、そういった理由もあり、初めてのおつかいならぬ初めての侵略ということでベジータ王子が直々に惑星ジスへ出向くことになった。しかし、いくら戦闘力が高いとはいえ、子供一人に今回の任務を任せるのは心配というフリーザの気遣いもあり、お世話役として私が、サポートとして私と仲が良いバーダック達がついて行くことになった。

私がいるのは明らかに過剰戦力だが、そこは仕方ない。現状フリーザ軍にわがままぼっちゃまのお世話役に適任の者が私しかいなかったのだ。ザーボンやドドリアはそういったことは苦手だし、ギニュー特戦隊など論外だ。そもそもみんな総じて家事が苦手である。

何気に私とベジータはこれが初対面だ。だから私はできるだけ媚びを売るように意識している。最初、ベジータが私に敬語を使っていたので適当な理由をつけてやめてもらった。なんてったって相手はサイヤ人の王子だ。将来伝説の超サイヤ人に目覚め、フリーザをも超え、最終的に超サイヤ人４まで登り詰める男だ。できるだけ良い印象を抱かれたい。でないと私は殺されることはないだろうが、確実にサンドバッグにされるだろう。

そんな情けないことを思いながら私はベジータとバーダック達に食事を運ぶのだった。

△

ベジータにとって咲夜は不可解な存在だった。
ベジータとベジータ王はフリーザを良く思ってない。本来自分が座るべき宇宙の支配者のイスに圧倒的な実力で座るその存在は許せるものではなかった。他のサイヤ人は兵士として自分達に戦闘を提供してくれるフリーザに感謝するものまでいたが、この二人はフリーザに対して根っからの対抗心を持っていた。
しかし、ベジータは父、ベジータ王程浅はかではなかった。フリーザは自分が真っ向から歯向かっても敵う相手ではないことは重々承知していた。だからベジータは父のように対抗心を表に出したりせず、それを内面に押し殺して表面上は忠誠を誓っているように見せる。
そして、サイヤ人のエリート戦士と戦い、力を蓄えていく。今は無理でも自分はサイヤ人の王子で天才だ。こうやって鍛えていればいつかはフリーザに勝てるはずだ。
そんな時だった。今回の惑星ジス攻略の話をベジータ王が持ってきたのは。聞けばその星の平均戦闘力はかなり低い。はっきり言って肩慣らしにもならないだろう。しかし、今までは形式ばった試合ばかりで生死をかけた戦闘をしたこともないのも事実。デビュー戦にはちょうどいいと思ってベジータは今回の任務に立候補した。
その時自分の世話係として抜擢されたのが咲夜だった。父やエリートサイヤ人の咲夜を見る目は実に憎々しげであった。父もよく自分に言っていた。サイヤ人が滅ぼし

た下等民族であるはずなのに奴だけは殺せず、あまつさえ戦闘力もサイヤ人を超える無礼な奴だと。その話を聞いた時はベジータも咲夜は倒すべき敵の一人だと思った。

だが、彼女に会ってからその評価は一変した。不可解。その三文字しか思い浮かばなかった。

咲夜は出発の前日、わざわざ自分の部屋に挨拶に来た。他のサイヤ人もしない礼儀正しい行為だ。さらに、彼女は自分に対して「敬語は使わなくていい」と言った。ツフル人を滅ぼした憎むべきサイヤ人の自分に。何故かと問えば、

「私は王専用の召し使いマシンミュータントですから、他の民族の王族の方に対する礼儀はわきまえているつもりです。」

と答えた。咲夜はフリーザの専用召し使いという、見方によってはザーボンやドドリアよりも高い地位にいる。だから本来自分が下手にでなければいけない所を彼女は自ら下手にでた。それがベジータには分からなかった。

ベジータにとって力とは振るうものであり、強い者は弱い者を従えるものだと認識している。なのに目の前の召し使いはそんなことはせず、強者でありながら平気で従えられ、自分は決して表には出ずにサポートに徹する。

サイヤ人の王子であるがゆえにベジータには咲夜の考えが分からなかった。彼は「長いものには巻かれろ」という言葉を知らない。自分自身が「長いもの」であることを信

じて疑わないから。
「ベジータ王子、お肉ばかりではなくて野菜も食べてくださいね。」
「けっ！よけいなおせわだ！」
　咲夜に対して疑問を募らせながら、ベジータはまだ小さく幼い口で咲夜の料理を食い漁った。

原作前、無印編・１４

▼

３日程宇宙船に揺られ、咲夜達は無事に惑星ジスへと到着した。途中バーダックとベジータの戦闘訓練で宇宙船が壊れかけ、咲夜とセリパがこっぴどく叱るというハプニングもあったがまあいいだろう。

咲夜達を乗せた宇宙船はゆっくりと着陸する。流石はフリーザのものと同型の宇宙船だけあって丸型宇宙船のように乱暴に着陸したりはしない。

「ここ」が惑星ジスか…。なるほど、確かに良好な星だな。」

「あぁ、欠点をあげるとすりゃあでかすぎることぐらいか。」

宇宙船から一足先に出たバーダックとトーマが惑星ジスを品定めする。多くの星を侵略してきた二人から見ても惑星ジスは良い星のようだ。

「ではもう一度確認します。今私達がいるのはこの星のちょうど真ん中、ベジータ王子と私は銀河防衛隊の本拠地のある北半球を、バーダック達は南半球を担当してください。」
「あぁ、分かってるよ。この星には月がないから大猿にはなれないね。侵略完了までに３日はかかっちまうか。」
「あまり時間がかかるようでしたら私も手伝いますので、いつも通り気楽にやってください。」
「よし！何かあったらスカウターで連絡だな！行くぞお前ら!!」
拳と拳を突き合わせ、気合いを入れたバーダックの掛け声で、バーダックチームの５人はその場から飛び去っていった。
「さくや！おれたちもいくぞ！ぐずぐずするな！」
「はい。行きましょうか。」
ベジータに急かされ、まもなく咲夜達も出発した。

▽

惑星ジスはとても大きな星で、なおかつ自称フリーザ軍よりも強力な正義の軍隊銀河防衛隊の本拠地があることから人口がとても多く、文化もそれなりに発達している。文化が発達しているということは食文化も発展していうということだ。特に惑星ジスには異星から移民してきた民族も多いので、様々な星の食文化が取り入れられている。

何が言いたいかと言えば、ベジータがその食文化に興味を持ち、破壊行為をする前に腹ごしらえしていた。大漁に買い占めた食べ物を咲夜に持たせ、商店街のような通りのベンチに腰掛けて貪るように食べるベジータと隣に座る咲夜は、はたから見れば大食いでグルメな観光客にしか見えない。

「はぁ…、宇宙船の食料をあれだけ食べてまだ食べるんですか。」

「がつがつ!ごくっ…!くえるときにくえるだけくってたたかう!それがさいやじんだ!」

「はいはい…。」

巨大なトカゲの丸焼きを食べ終わったベジータの自信満々の言葉に咲夜は適当に相槌を打ち、今度は黄色い焼きそばのような食べ物をベジータへ手渡す。

吸い込むように食べ始めたベジータを尻目に、咲夜は惑星ジスの住民を観察する。サイヤ人や地球人と大差ない人間型の宇宙人もいれば、犬や猫が人へ進化したような宇宙

人、さらには虫が二本足で歩いているような宇宙人もいて、誰もが種族の違いなど気にしないように生活している。ゴキブリ型の宇宙人に人間の女の子が抱きつく光景を見て咲夜はゾクッと寒気を感じた。

種族など関係なく生きる理想郷がそこには広がっていた。しかし、咲夜はその理想郷をこれから破壊しなくてはならない。

それについて罪悪感がないわけではない。だが、この星を滅ぼすことで恩恵を得る星はかなりある。銀河防衛隊のせいでスムーズに仕事ができずに足踏みをしているのはフリーザ軍だけではないのだ。何より、咲夜自身が生きるためにはやるしかない。

本当は咲夜もできることなら殺生はしたくないが、そうも言ってられないのも現実。理想だけでは生きていけないのだ。

「せんとうりょく２１９…３１４…４１２…ふんっ！くずが！」

不意に咲夜は横からベジータの不機嫌そうな呟きを聞き取った。見ればベジータがスカウターで街の見回りをしている銀河防衛隊隊員の戦闘力を計測し、その結果に苛立っている。

ベジータが苛立つのも無理はない。そもそもすぐ近くに敵対勢力の咲夜達がいるのに気づかないのも問題だ。戦闘力だけでなく、危機察知能力も低いらしい。

まあ、銀河防衛隊がそうなのも仕方ないのかもしれない。かの徳川家康が言ったよう

に、人は人数が集まるとその「数」に甘えてしまい、個々の戦力、戦術が疎かになってしまう。人数がやたらと多い銀河防衛隊にありがちな罠だ。数は確かに強力な武器だが、そういった可能性も孕んでいる諸刃の剣なのだ。

「ベジータ王子、あまりスカウターの数値を信用しないで下さい。その数値はただの目安でしかありません。」

「おれにさしずするな！いくぞ！」

ベジータは咲夜の注意を気にもとめず、食べ終わった料理のパックをその場にポイ捨てして飛び去る。

「まったくもう…。」

咲夜はそのパックを拾い、ベジータを追うように飛び去った。

◇

「よく来てくれましたね。歓迎しますよ。」

咲夜達が銀河防衛隊の本拠地に着くと、何故か手厚い歓迎を受けていた。恐らく幹部

であろう俗にいうイケメンの男が咲夜達へ無防備に近づき、咲夜の手をとって握手をする。ここでも銀河防衛隊の慢心が表れている。敵を歓迎するバカがどこにいるというのか。その態度にベジータはもはや不機嫌を隠そうとせず、咲夜も表面上は営業スマイルを浮かべているが内心では呆れ返っていた。フリーザが相手にしたくなかった理由がよく分かる。

余裕そうに基地を紹介する男に殴りかかろうとするベジータを咲夜は制止し、このまま奥まで連れていってもらおうと提案する。どんな組織も指示を出す中心がやられてしまえば統率がとれなくなり、たちまち崩壊する。銀河防衛隊の相手をするのが面倒くさくなった咲夜はそれを狙って手っ取り早く終わらせようと言うのだ。そんな咲夜の気持ちが分かったのか、ベジータも素直に了承する。

こうして咲夜とベジータは男に色々と基地を紹介された。面倒を省くために付き合うつもりだった二人だが、銀河防衛隊の施設や技術自体には目を見張るものがあった。特に食堂の施設は咲夜も思わず賞賛していまい、帰還したら早速フリーザにねだってみるつもりでいた。

「さて、ところで今回はどういった御用件でしょうか？」

一通り基地を紹介させた所で男が咲夜達に問いかけた。もう頃合いかと判断した二人は戦闘態勢に入る。

「毎年あなた方からはこのような素敵なお手紙をいただいておりますので今回は……」
咲夜は懐から銀河防衛隊からの文句がつらつらと書かれた書類を取りだしヒラヒラと振る。そしてそれを気で燃やし、消し炭にし、凍てつくような笑みでこう言った。
「そのお礼をと思いまして。」
それを聞いた男がフッと笑い、パチンッと指を鳴らすと大勢の武器を構えた兵士が現れ、咲夜とベジータを囲む。
「愚かな…。たった二人だけで我々と戦うおつもりで?」
「ふたりじゃねぇ!おれひとりでじゅうぶんだ!」
そう言ってベジータは目の前の兵士に蹴りかかる。相手は子供と油断していた兵士だが、ベジータのほうが戦闘力は上。あっさりと蹴り飛ばされ、壁に激突してグチャッと潰れ、息絶えてしまった。
「……え?」
「流石は王子。見事な蹴りでしたよ。」
「ふっ、とうぜんだ。」
男は呆けたような顔になり、咲夜はベジータを誉めてベジータは得意そうな顔をする。ようやく二人の実力に気づき、全力で襲ってくる銀河防衛隊の面々だがすべては遅すぎた。ベジータ一人で淡々と片付けてしまう。男が仲間を呼んだのか大勢の兵士が

部屋に押し掛け、基地中の兵士ＶＳベジータという戦いになったが、それでもベジータの優位は変わらなかった。途中男も参戦していたが結果は同じ。兵士達はベジータに殴られ、蹴られ、エネルギー波で消し炭にされていた。

ベジータには敵わないと判断した何人かの兵士が咲夜にも襲いかかってきたがそれは愚策である。咲夜のほうがベジータより戦闘力が高いため、当然ながら返り討ちにあっていた。

「おっ…おのれっ……!!」

ベジータにやられ、イケメンな顔がボコボコの血まみれになった男は緑色のやけに長い日本刀のような武器を取り出した。みるからに禍々しい、ドス黒い気を放っている。それを見て咲夜は警戒を強める。

「ふはははっ!!これで貴様らは終わりだ!!」

「けっ！なんのつもりかしらんがぶっころしてやる！」

男が刀を構えてもベジータは臆することなく突っ込んでいく。咲夜はそれを見て嫌な予感を感じた。戦闘力はベジータのほうが上であり、間違いなくベジータが勝てるのだが、何となく妙な感覚がしたのだ。

「死ねぇぇぇぇぇ!!!」

「!!王子!!」

男が刀をベジータに降り下ろした瞬間、咲夜はその場から飛び出し、ベジータを突き飛ばした。
「がっ!」
突き飛ばされたベジータは床に強く叩きつけられるが、何とか着地する。
「さくや!きさまなにを……なにっ!?」
起き上がって咲夜へ怒鳴るベジータだが、目に飛び込んできた光景に驚愕の声をあげた。

「…がはっ……」
咲夜が緑の刀で胸を貫かれていた。

原作前、無印編・１５

▼

「ちっ！邪魔だ！どけっ!!」

ドカッ！

「がふっ……！」

「ぐあっ！」

男は咲夜に刺さった緑の刀を引き抜くために咲夜の体を蹴り飛ばした。ちょうど蹴り飛ばした方向にいたベジータは巻き込まれ、咲夜とともに壁に叩きつけられる。

「どけっ！きさま！なにをしやがった！」

ベジータは咲夜を突き飛ばして起き上がると男に叫ぶ。男は何か妙なことをしたのだろう。でなければ自分より戦闘力が高い咲夜があんな簡単にやられるわけがない。

「くくくっ！これぞ我が銀河防衛隊の秘宝、宝剣”デッド・ブラッド”だ！この剣から発せられる気はあらゆる物質を腐敗させ！いとも簡単にどんな物も叩き斬ることができ

るのだ！」
「なにっ!?」
　額に冷や汗をかくベジータがその剣、宝剣”デッド・ブラッド”を見れば確かに真っ黒な、見ているだけで吐き気がする気を纏っている。
「それだけではないぞ!!この剣から発する気はわずかな空気の流れまで感知し、相手の動きを読む!!いくら貴様らが強くても！動きを読んでしまえばどうということはない!!死ねぇぇ!!」
「くそっ!!」
　襲いかかってくる男の剣をベジータは必死に防御するが、剣に触れるたびにダメージを受けるのは自分であり、なおかつ動きまで読まれてはさすがのベジータも防戦一方になってしまう。
「ちっ！くらえ!!」
　これでは埒が明かないと判断したベジータは一旦間合いを取り、エネルギー波を撃つ。しかし……
「はあ!!」
　ガキンッ!!
「なっ！なにっ!?」

それすらも男は剣ではじいてしまった。本来ベジータより戦闘力が低いはずの男がこんな芸当ができるのは、ベジータは知る由もないがこれも剣の効果であった。

宝剣”デッド・ブラッド”が使用者に与える力は腐敗属性と予測能力だけではない。暗黒の気は使用者本人の肉体にも作用し、戦闘力を倍以上へと跳ね上げる。つまり、意図的に火事場の馬鹿力を出すという暴挙に出るのだ。こんな無茶をすれば後々後遺症として残るのは確実だが、そのおかげで戦闘力が１０００程度の名もない男はベジータと対等に戦うことができている。

「ぐはっ!!」

やがて腐敗によるダメージが限界に達したベジータは再び吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「終わりだ……。正義の名のもとに死ぬがいいっ!!」

男はヒタヒタとベジータに歩み寄り、やがて顔を狂気に染めてベジータへと斬りかかる。両手が腐りかけ、もはや防御もできないベジータは思わず目をつむる。

（ここでおわりか……。ちっ!なさけねぇしにかただ!）

ベジータは自分の不甲斐さに悪態をつき、死を待った…。

だが、いつまで待ってもその時が訪れない。不思議に思って目を開けてみると……

「な……なんだとっ……!!」

「…それ以上王子に近づかないでいただきたい。」

咲夜が男の剣を右の人差し指と親指でつまんで止めていた。その行為に男は驚愕の表情を浮かべている。やがて男は咲夜から間合いを取るように後ろへ飛ぶ。

「バカな…!!貴様は俺に心臓を貫かれ死んだはずだ!!」

「そうですか……」

宝剣”デッド・ブラッド”の反動もあり、冷や汗をダラダラと滝のように流す男に対して咲夜はメイド服の破れた部分を開いて見せる。胸を開いたことで下着が見え、官能的だがこの場にそれを気にする者はいなかった。

「私は貫かれた記憶はありませんけどね。」

無傷の胸を見せ、小首を傾げ、ニヤリと笑ってみせる咲夜に男は確かな恐怖を感じた。

「うわあぁぁぁぁ!!!」

その恐怖を誤魔化すように男は大声をあげながら咲夜へと斬りかかる。それに対し

て、咲夜は右足を少し下げ、左手を右腰の辺りに引いて構えを取った。そして男の剣が自分に届くのに合わせてその左腕を軽く振り、こう呟いた。

「全反撃（フルカウンター）」

すると咲夜へ向かうはずだった暗黒の気はすべて男の元へと跳ね返った。しかもその気は男を全身をみるみる腐敗させていき、明らかに威力は上がっている。

「ぐあぁぁぁぁぁぁ!!!」

男は吹き飛ばされ、剣を手放した状態で床に這いつくばる。剣を手放したことで強化状態が解け、その反動で体中に激痛が走り、腐敗も相まって動くことができない。

しかし、目の前の敵は容赦しない。咲夜は気品を感じさせる歩みで男へゆっくり歩み寄り、やがて右手に気を溜め始めた。

「まっ…まてっ!!私を殺せばこの宇宙に正義はなくなってしまうぞ!!いいのか!?それでも!?」

「構いませんよ。少なくとも私の道にあなた方の正義は必要ありませんから。では、ごきげんよう。」

ズボッ!!

男の命乞いを気にもとめず、咲夜は冷酷にエネルギー波を放ち、男をこの世から消滅させた。咲夜には剣で貫かれた時のメイド服の破れ以外目立った傷が見当たらない。

まさに強者の出で立ちだった。
それを見てベジータは歯軋りする。
何だこれは？
強者は自分ではないのか？
咲夜こそ真の強者ではないのか？
それに比べ自分はどうだ？
なんと情けない！
格下のツフル人に命を助けられ、あまつさえ自分の獲物もツフル人に取られ、自分はそれを指をくわえて見ているだと!?
ふざけるな！
こんなものではない！自分はベジータだ！サイヤ人の王子だ！まだまだ強くなれる！いつかあいつを超えてやる!!
「大丈夫ですか？王子。」
「よけいなまねするな！さっさとこのほしをせいふくするぞ！」
ベジータは差し出された咲夜の手を払いのけ、自分を奮い立たせた。自分が最強になってやると。

◇

”時間”とはすなわち”流れ”である。例えるなら川の水が上流から下流へ流れるように、時間も過去から未来へと流れている。

「時間を操る程度の能力」はその時間の流れを操る力だ。ある時はダムのように時間をせき止め、ある時は流れを逆流させ、ある時は流れを速くする。

この理論でいけば、まあ無理矢理だが私の能力は「流れを操る程度の能力」と解釈することができる。無理矢理解釈した分エネルギーの消耗は激しいが、できることの幅は広がる。

例えば私がさっき男に対してやった某騎士団の某団長の技「全反撃（フルカウンター）」。あれはサイヤ人に攻め込まれた時、ツフル王を大猿サイヤ人の気功波から守る際に偶然生まれた技だ。放出された”気”の流れを操り、逆流させ、さらに流れを速くすることで完成する技である。

一見強力なこの技だが、実は私はあまりこの技を多用したくない。ていうか使いたく

ない。

なぜかというとこの技、タイミングが恐ろしい程シビアなのだ。少しでもタイミングを誤れば無防備のまま私の身体は気功波に包まれることになる。なおかつ、前述の通り無理矢理能力を解釈した分、エネルギーの消耗が激しいのだ。

フリーザ軍でサイバイマン達に手伝ってもらって何とか成功確率を6割程度まであげることはできたが、それでも恐いものは恐い。不死身の私は死ぬことはないが痛みはちゃんと感じるのであまり無茶はしたくない。

某団長さんはこんな技をポンポン使っていたのだから脱帽である。私、帽子かぶってないけど。頭のフリルがついたカチューシャでもとろうか。

「大丈夫ですか？王子。」

「よけいなまねするな！さっさとこのほしをせいふくするぞ！」

私がベジータに手を差しのべると、ベジータはその手を払いのけてさっさと基地から飛び去ってしまった。あの顔を見る限り、かなり不機嫌になっている。

あれ？私怒らせるようなことしたかな？

私が疑問に思っていると右耳のイヤリング型通信機に通信が入った。

「はい。こちら咲夜。」

『咲夜！調子はどうだ？』

バーダックだった。聞けば彼らは担当の南半球の３分の１は侵略し終わったらしい。憎たらしいことにその自慢をしてきたのだ。

私のせいじゃない。仕事が遅れてるのはベジータのせいだ。やつが途中で買い食いなんてするからだ。

私はそう自分に言い聞かせ、自分を正当化し、バーダックからの通信を切ってベジータを追いかけた。

それから２日後、惑星ジスは完全にフリーザ軍の手に落ち、惑星フリーザＮｏ．５９と改名された。

原作前、無印編・16

◇

サンサンと大地に恵みをもたらす太陽が沈み、サイヤ人に絶大な恩恵をもたらす月が輝く夜。惑星ベジータの王城、王の玉座がある「王の間」。現在ここには星中のエリートサイヤ人が集められていた。エリートサイヤ人が充分集まったことを確認したベジータ王はやがて玉座から腰を上げて立ち上がる。

「お前達も知っている通り、我々サイヤ人がフリーザの舎弟に入って一年。我々はこの一年、苦汁を舐めるような思いをしてきた。」

集まったエリートサイヤ人達はベジータ王の話を神妙に聞いている。

「今宇宙は間違いなくフリーザの支配下にある。だが！そんなことが許されていいのか！宇宙を支配すべきは紛れもない誇り高き戦闘民族サイヤ人だ！フリーザなどでは断

じてない！」
　声を張り上げて演説をするベジータ王に、エリートサイヤ人達の瞳に徐々に炎が燃え始める。
「よって！ワシは明日フリーザを打ち倒すべく戦う！誇り高きサイヤ人の諸君！ワシと共に来る者は心臓を捧げよ！サイヤ人に栄光を！」
「「サイヤ人に栄光を！」」
　ベジータ王が右の拳を左胸に当てて敬礼すると集まったエリートサイヤ人の全員が同じく敬礼をする。それを見てベジータ王は満足そうにニヤリと笑った。
　サイヤ人の反逆の始まりだ。

▼

「サイヤ人についてどう思いますか？」
　私がフリーザ様にお仕えして早一年がたった。その間に侵略、破壊した星、奪った生

命は数えきれない。奪った生命は最初から数えていないが、星のほうは８つ目から数えるのをやめた。

一年の間私はフリーザ様にはだいぶお世話になった。仕えた当初は意識的に払っていた敬意も今では無意識下で払えている。やはりフリーザ様は全生命の天敵だ。敵にすれば恐ろしいし、味方になれば離れられなくなる。

そんな日々を過ごしていたある日、フリーザ様が私にサイヤ人について聞いてきた。

「ツフル人の敵です。」

当然私は即答した。するとフリーザ様の求める回答ではなかったようで、フリーザ様は苦笑する。

「あ、いえそういうことではなくてですね…。」

「？と言いますと？」

「先日サイヤ人について調べていたらですね、”超サイヤ人”という単語を見つけましてね。咲夜さん、何か知っていますか？」

フリーザ様から超サイヤ人という単語を聞いた時、私の人工赤血球循環装置（人間でいう所の心臓）がドクンッと音を立てた。そして思う。「あぁ、この時が来てしまったか」と。

「はい。超サイヤ人とはサイヤ人の中で千年に一人現れるという伝説の戦士です。どん

な天才でも越えられない壁を越えてしまうのだとか。」
　原作知識から超サイヤ人のことは知っていたので私はフリーザ様に嘘偽りなく話す。するとフリーザ様は「なるほど…」と何かを考えるように目をつむる。
　フリーザ様が超サイヤ人について興味を持ったということはまもなく「たった一人の最終決戦」が始まるのだろう。超サイヤ人の出現を危惧したフリーザ様がサイヤ人を惑星ベジータごと滅ぼすこの後のドラゴンボールのストーリーのすべての引き金となる出来事だ。
　フリーザ様が目をつむって考え事をしているとウィーンと部屋の自動ドアが開いた。私が振り向けばそこには五歳になったベジータが立っていた。
「ベジータ王子、どうかなさいましたか?」
「おれはふりーざさまにしゅっぱつのごあいさつをしにきただけだ!」
　私が腰をおとしてベジータと目線を合わせて尋ねるとベジータは不機嫌そうに吐き捨てた。
　ええ…そこまで邪険にしなくてもいいじゃない。
　一年前の惑星ジス侵略の任務からベジータは私に対してやたらツンツンした態度をとってくる。あのあとベジータはフリーザ軍の上級兵士などと戦い凄まじい特訓を繰り返し、今では戦闘力１３０００。父であるベジータ王すらも越えてしまった。たまに

私も特訓に付き合ってあげたが、その時でもベジータは常時ツンツン状態だった。

私が一体何をした。

「ふりーざさま、わくせいぼーろのしんりゃくにいってまいります。」

ベジータは言葉の通り、フリーザ様へ惑星ボーロ侵略の出発の挨拶をする。手を胸の辺りに添え、丁寧にお辞儀をする様はベジータ王よりもりっぱだ。

「……」

しかし、フリーザ様は目をつむったままでベジータへ答えようとしない。相当考え込んでいる。

「フリーザ様は今お取り込み中みたいです。王子が挨拶に来たことは後で私が伝えておきますから。」

「……しつれいします。」

何ともいえない気まずい空気が流れたので私がなだめるように話すと、ベジータはさっさと部屋を出ていってしまう。そんな彼に私は小さく手を振って「いってらっしゃいませ」と声をかけたが無視されてしまった。反抗期というやつだろうか。

「決めましたよ咲夜さん。」

後ろから声が聞こえたので振り返ってみるとフリーザ様が目を開けて何かを決心したような顔をしていた。

「サイヤ人は滅ぼしてしまいましょう。」
「……了解致しました。」
フリーザ様の言葉に私は深く礼をして答えた。

原作前、無印編・17

▼

フリーザの部屋には現在、咲夜に加えザーボンとドドリアも呼び出された。サイヤ人に対する今後の方針を決めるためだ。ギニュー特戦隊も呼び出す予定だったが、休暇を利用して海へ行っているらしく、徴収を拒否された。それについてフリーザが頭を抱えたのは言うまでもない。

「して、フリーザ様。本当にサイヤ人を滅ぼしてしまうのですか？」

「ええ、そうですよ。これはもう決定事項です。」

ザーボンが投げ掛けた質問にフリーザは頷く。

「いや～そうか。まあ、あいつらの態度から考えりゃ当然か。サイヤ人連中はよく働くもんだからおしいっちゃおしいな。」

　ドドリアは腕を頭の後ろに組んで呟く。するとそこへ咲夜がワインとワイングラスを台車に乗せてやって来る。咲夜はフリーザの側で台車を止めるとグラスをフリーザへ手渡し、キュポンッと音を立ててビンのコルクを抜き、トクトクとグラスへワインを注ぐ。咲夜が注ぐワインをフリーザが飲む。この光景はこの一年ですっかり見慣れたものとなった。
「そういえば、さっきもサイヤ人の一団がカナッサ星を征服したと報告があったな。」
「誰なんだ?そのカナッサ星を滅ぼしたって野郎は?」
「バーダックというサイヤ人のチームだ。」
「バーダック?」
「咲夜と仲の良い連中だ。バーダックは下級戦士ながら幾多の戦いでエリートにも引け劣らない力を持っている。」
　ザーボンがドドリアとの会話でバーダックの名前を出した時、咲夜の顔がほんの少し歪んだ。普通は気がつかない程の小さな変化だが、フリーザはその変化を見逃さなかった。
「咲夜さん。」
「っ…はい。」
「当然バーダックというサイヤ人も殺しますよ?」

「…存じ上げております。」

フリーザの言葉に咲夜は深く礼をする。その後「しかし」と顔をあげた。

「サイヤ人を滅ぼすにあたって一つお願いがあるのですが……」

「ほう、いいですよ。聞きましょう。あなたからはこの一年ほとんどそういったお願いを聞きませんでしたからね、嬉しいです。」

咲夜が若干しどろもどろになりながら言うとフリーザはニコリと笑って咲夜のほうへ向く。それに対して咲夜は「ありがとうございます」と礼をしてから話し始める。

「ベジータ王は私のこの手で殺させていただけないでしょうか?」

「あぁ、なんだそんな事ですか。もちろんいいですよ。そもそもあんな塵一粒など本来私が出るまでもありませんからね。」

咲夜のお願いにフリーザは愛想良く笑みを浮かべ、快く了承すると再び向き直ってワインを飲む。すると今度はザーボンが「そういえば」とフリーザへ話しかける。

「何ですか?ザーボンさん。」

「サイヤ人を滅ぼすことには異議ありませんが、優秀な者一人くらいは手元に残しておくのが賢明かと。」

「ええ、私もそう思っていました。今回、ベジータ王子は残すつもりでいます。」

「ベジータ……あのガキですか?」

「ええ、あの子は愚かな父と違って礼儀正しく賢明ですからね。将来はいい兵士になってくれるはずです。」
　そう言ってフリーザはワインのグラスを傾ける。隣でその会話を聞いていた咲夜はベジータがいい兵士になどならないことを知っているが口には出さない。余計な口出しをして原作が変わってしまっては困るからだ。
　と、その時、ゴゴゴゴと突然地面が揺れた。強靭な肉体を持つフリーザ達は特に倒れることはなかったが、揺れのせいでフリーザはワインを数滴自身の膝辺りに溢してしまう。
「フ、フリーザ様！大変です！ひっ!!」
「……どうしました？アプール。」
　そこへフリーザ軍兵士のアプールが慌てた様子で部屋へ駆け込んで来た。アプールはワインを溢したことで苛立っているフリーザに怯えた声を出す。そんなアプールに咲夜が問うとアプールは気を取り直して敬礼をした。
「サイヤ人が反乱を起こし、この星へ攻め込んできました!!」
「……サル野郎共め……！全く不愉快な連中だ……！」
　フリーザは怒りの表情を浮かべた。恐怖に耐えきれなくなったアプールは「しっ失礼しましたぁ～！」と言って退出している。

「咲夜さん、ザーボンさん、ドドリアさん。」
「「はっ！」」
「予定を早めます。今日すぐにサイヤ人を滅ぼしますよ！」
「「了解でございます。」」
　三人は綺麗に揃って礼をした。

原作前、無印編・１８

▽

ドォーンッ!!

惑星フリーザのフリーザの城の庭に無数の丸型宇宙船が音を立てて着陸した。咲夜によって綺麗に手入れされていた庭はクレーターだらけになってしまった。

「よし!皆の者!ワシに続け!!」

「「おぉーーー!!!」」

ベジータ王は王家の紋章が入ったポッドから出ると右腕を高らかに上げてエリートサイヤ人達を掻き立てた。

「お、お前達!!何をしてい……ぐわあっ!!」

城の兵士が異変に気付いてやってくるも、エリートサイヤ人に殴られ、あっさり倒さ

れてしまう。その後もサイヤ人達は兵士をなぎ倒しながら城の中を突き進んだ。
「フリーザッ!!」
そしてついにフリーザの部屋へと到着。ベジータ王が扉を蹴破って突入し、エリートサイヤ人達もその後に続く。
サイヤ人達の目には腕組みをするドドリアとサイヤ人達に目線を向けているザーボン、優雅にワインを片付ける咲夜が映り、フリーザは窓の外を眺めていた。
「ベジータ王、何の用ですか?·来いと言った覚えも来るという連絡もありませんが。」
「ふんっ、貴様がそうやって偉そうにしていられるのも今日で最後だ!·全宇宙は我々サイヤ人が支配する!·」
「ほう……それはまぁ何とも愚かで浅はかな野望ですね。それで?·そのために虫ケラのあなたが後ろの大量のウジ虫を引き連れて反乱を起こした訳ですか…。」
「なめるなよ!·かぁぁ!!」
ベジータ王はフリーザへと殴りかかった。
「!?·なにっ!?」
「……」
しかし、その拳はいつの間にかフリーザとベジータ王の間に移動していた咲夜の掌に止められ、フリーザには届かなかった。

「くっ！貴様…ツフル人!!」
「……フリーザ様の神聖な面前です。そのような無礼は許されません。」
「ツフル人ごときがでかい口叩きおって…!!はあぁ!!」
　ベジータ王は咲夜へ右の拳を向ける。咲夜はそれを右の掌で受け止め、さらに受け流した。攻撃を受け流されたベジータ王は一瞬体勢を崩してしまう。
「はっ！」
「ぐはっ!!」
　その隙を咲夜は見逃さず、腹部へ強烈な一撃をお見舞いした。ベジータ王は後ろへ吹き飛び、エリートサイヤ人達を巻き込んで城の壁をぶち抜き、庭へと吹き飛ばされた。
「ぐっ……！おのれぇぇ!!」
　ベジータ王は額に青筋を浮かべ、庭へ降りてくる咲夜を見上げた。
「はあぁぁぁぁぁ!!!」
　ベジータ王は腰を落とし、拳を握って気合いを入れた。するとベジータ王の体の周りに白い炎のようなオーラが現れる。ベジータ王のパワーはどんどん上昇していく。
「はあ！だだだだだだ!!」
　やがてパワーを上げきったベジータ王は咲夜の元に飛び、猛烈なラッシュを仕掛けた。鍛えぬかれた戦闘民族サイヤ人の王の攻撃が咲夜の細い体を襲う。

「はあ!!……!?なっ!?」
「……」
ラッシュも終わり、ベジータ王はトドメのつもりで咲夜へ渾身の力を込めてパンチを繰り出す。しかし、その拳はまたしても咲夜の掌で止められてしまった。ベジータ王は信じられないという表情を浮かべる。
「バカな……!ワシの……渾身の拳を……!!」
「前々から感じていたことですが、あなたは戦闘民族の王でありながら、何か勘違いされているようですね。はっ!」
「がはっ……!!」
咲夜はベジータ王の腹に右足の蹴りで攻撃する。
「パワー……。」
「くっ!!」
痛さで腹を押さえるベジータ王は咲夜に右の手刀を振ることで反撃しようとするが、咲夜はシュンッとその場から消え、ベジータ王の後ろへ回り込んだ。
「スピード……。」
「うおぉぉ!!」
ズガッ!!

ベジータ王は咲夜の腹部へ強烈なアッパーをお見舞いした。咲夜はそれを敢えて避けず、正面から受け止めた。ベジータ王の拳は咲夜の可憐な体を貫き、咲夜はゲボッと大量の血を吐いたが特に気にした様子もなくしゃべる。
「防御力……等々、戦闘力とはそういった様々な能力を総合的に見た上ではじき出される数値です。あなたのようにパワーだけを愚直に鍛え上げただけでは何にもなりません。こんなことはあなたの息子さん、ベジータ王子でも分かります。」
「ぐっ……!!貴様っ……!!」
ベジータ王はこれ以上ない屈辱に怒りをあらわにしながら右手を上に向けた。
「はあぁぁぁぁぁ!!」
するとベジータ王の右手から小さな気の玉が出現した。ベジータ王はニヤリと笑うとその気弾を天高く放った。
「はじけて混ざれ!!」
ベジータ王は気弾がある程度の高さに到達すると右手をグッと握った。すると気弾はパァンと弾け、次の瞬間には小さな月が誕生していた。
パワーボール。ごく一部の限られたサイヤ人にのみ生み出せるその気弾は、星の酸素と混ぜあわせることで人工的な月を生み出すことができる。
「か、かぁぁぁぁぁ……!!」

ベジータ王とエリートサイヤ人達はその月を見ることで一斉に変身を始めた。身体中に体毛が生え、体もどんどん大きくなっていく。やがて咲夜は大勢の大猿サイヤ人に囲まれてしまった。

「ふはははははは!!いくら貴様でもこの数の大猿からは逃れられまい!!喰らえっ!!」

ベジータ王はエリートサイヤ人と共に咲夜へ口から強力なエネルギー波を発射した。大猿となり、戦闘力が１０倍にアップしたサイヤ人達のエネルギー波は凄まじい爆発を生んだ。

「ふはははははは!!所詮ツフル人など虫ケラに過ぎんのだ!!」

「そうでしょうか?」

高笑いするベジータ王。しかし、後ろから咲夜の声が聞こえた。振り返ればそこには不死身の力で傷が綺麗さっぱり消えた咲夜がいた。

「っ……!ほう、今のは防いだようだな。だが、そう長くは逃げられまい。」

「ふふふっ、さて問題です。あれは一体何でしょう?」

大猿になったことで冷静さと余裕を取り戻したベジータ王は不敵に笑うが、咲夜はそんな彼を軽く笑い、庭の一角を指さす。そこには無数に積まれた茶色く太く長い何かがあった。

「!?まさか!あれは……!!うっ!!」

　その正体に気づいたベジータ王だがもう遅かった。大猿となった体から力が抜け、徐々に体が縮み始める。そしてサイヤ人達は人間の状態に戻ってしまった。サイヤ人達の腰からはポタポタと血が滴っている。そう、咲夜が指さしたのはサイヤ人達の尻尾だった。大猿になるのに必要なのは尻尾と満月。それを知っていた咲夜はエネルギー波が当たる直前に時を止め、サイヤ人達の尻尾を切りながらベジータ王の後ろへ移動したのだ。
「フリーザ様が何度も忠告なさったはずです。大猿は隙が大きすぎると。」
「っ……!!おのれっ……!!おのれっ!!皆の者！何をしておる!!かかれっ!!」
「「うおぉぉぉぉ!!!!」」
　ベジータ王に指示され、エリートサイヤ人達は一斉に咲夜へ襲いかかった。
「……」
　咲夜は目をつむり、気を集中させる。
「あの時……私に力があれば……」
　咲夜の体をツフル人特有のピンク色の気が包み込む。
「大切な人を守れる……。はあ!!」
　ボンッ!!
　咲夜は一番近くに迫っていたサイヤ人の顔を殴りつけた。そのサイヤ人の顔は咲夜

の力で爆発するように粉砕されてしまう。
それを皮切りに咲夜はサイヤ人達を圧倒的な実力で殺し始めた。ある者は殴り殺し、ある者は蹴り殺し、ある者はエネルギー波で消し炭にした。やがてエリートサイヤ人達は数分足らずで全滅してしまった。
「なっ……!!なっ……!!」
「(ペロッ」
余りの光景にベジータ王はわなわなと震えている。そんなベジータ王を尻目に咲夜は血で汚れた手の甲を舐めている。
「あああぁぁぁぁぁ!!!」
ベジータ王は全力でパワーを上げるとはるか上空へ飛んだ。そして合わせた両手を腰の辺りに構え、さらに気を溜める。
「この星ごと!貴様も!フリーザも!粉々に打ち砕いてくれるーー!!!」
「……」
咲夜はベジータ王を無表情で見上げる。やがてベジータ王は気を最大限まで高め、極太のエネルギー波を放った。
「……この時をどれ程待ちわびたか…。復讐などくだらないことだと理解していても、やはりこの時を願わずにはいられなかった……。」

迫るエネルギー波に咲夜は左腕を腰の辺りに構え、タイミングを合わせて振った。
「全反撃（フルカウンター）。」
するとエネルギー波は倍以上の太さとなり、ベジータ王へ跳ね返った。
「おおぉぉぉぉ!!ぐわぁぁぁ……!!!」
誇り高き戦闘民族サイヤ人の王、ベジータ王の最期は跳ね返された自身のエネルギー波に飲まれるというみじめなものだった。
「……見ていますか？先輩、ツフル王……、私はやっと、あなた方の仇を討つことができましたよ。」
天に向かって笑顔を見せる咲夜。その表情は憑きものが取れたようにスッキリしていた。
「咲夜さん、終わりましたか？」
ぶち抜かれた城の穴からフリーザが咲夜へ声をかける。
「はい、たった今完了致しました。城や庭を荒らしてしまい、申し訳ありません。」
「構いませんよ。１秒で直しなさい。」
「はっ。……終了です。」
指示された咲夜が指を鳴らすと次の瞬間には荒らされた庭や城が元通りになっていた。時を止めて修繕したようだ。

「よろしい。では、皆さん、本格的にサイヤ人を滅ぼしますよ！」

「「はっ！」」

フリーザの声にザーボン、ドドリア、そして咲夜は力強く返事をした。

原作前、無印編・１９

◇

ゴオオオオ……ドスゥン！

私は惑星ベジータの飛行場の丸型宇宙船の着地ポイントに着陸した丸型宇宙船から出る。惑星フリーザではフリーザ様専用召し使いである私をたくさんの兵士がお出迎えしてくれるが、ここはサイヤ人の星惑星ベジータ、お出迎えなどしてくれるわけがない。私としてはこの方が落ち着くので特に気にしない。私はスタスタと育児スペースの方へ向かう。

数分程すれ違うサイヤ人達に睨まれながら歩くとカプセルに入ったたくさんの赤ん坊のサイヤ人がいる育児スペースへと到着した。

「これはこれは咲夜様。」

「敬礼は結構ですよ。作業を続けて下さい。」
　自動ドアを開けて中に入ると、赤ん坊サイヤ人をカプセルの中のメディカルマシーンの液体に浸け、そのカプセルの前のパネルをピコピコいじっていた老人の鳥型宇宙人が立ち上がって私に礼をした。老人は赤ん坊サイヤ人の潜在能力を調べているようだった。
「今年のサイヤ人は中々優秀ですよ。高い数値の者が非常に多い。」
「そうですか。」
　私は老人と話ながら机の上に並べられた測定結果を流し見る。１０５、２０１、２３４、……と赤ん坊にしては高い数値が並び、誰もが将来はエリート戦士として活躍するであろう赤ん坊ばかりだ。サイヤ人が惑星ベジータと共に滅ぶというのにこれ程将来有望な戦士が生まれるとは…何とも皮肉なことである。
「あ！おい！さくや!!」
　私がサイヤ人の運命に苦笑していると、自動ドアがウィーンと開いて元気な声が聞こえてきた。振り向くと全身傷だらけで顔をボコボコに腫らしたラディッツが手を振っていた。
「ラディッツ！咲夜様に無礼であるぞ!!」
「構いませんよ。」

「さくや!・きてくれ!・おれのおとうとがうまれたんだ!!」
そう言ってラディッツは私の腕をぐいぐいと引っ張る。それより私は君のその傷を問いただしたいのだが。聞いてみると「やっとせんししょうにんしけんにごうかくしたんだ!」らしい。ラディッツは今日から一人前の戦士ということだ。
ラディッツに連れられ、私はとあるカプセルの前にやって来た。そこには寝癖のような特徴的な髪型をした一人のサイヤ人がすぅすぅと寝ていた。カプセルのプレートにはサイヤ人の言語で『カカロット』と刻まれている。間違いない。ドラゴンボールの主人公”孫悟空”だ。
「あぁ、その者は今年のサイヤ人の中で最も潜在能力が低くてですな。まあ、間違いなく下級戦士、どこか辺境の星へ送る予定です。」
老人は私に他のサイヤ人の結果を報告する時とは一転し、まるでゴミを捨てるかのようなもの言いでそう言った。赤ん坊とは敏感なもので老人の嫌みを感じ取ったのか、そのタイミングで悟空はびぇぇぇんと泣き出してしまった。
「うっ!!こいつなきごえうるせぇんだよな!・じゃあな!・さくや!!おれ、さっそくしんりゃくにいってくる!!」
ラディッツは耳を塞ぎ、そう言って足早に育児スペースを後にした。私はそんなラディッツに「まず傷を治しなさい」と声をかけておいた。私はカプセルの開閉スイッチ

をポチッと押し、悟空を抱っこしてよしよしと揺らす。しばらくそうしていると悟空は泣き止み、きゃっきゃっと笑いながら私の顔へ手を伸ばした。私はその無邪気さに何だか胸が熱くなり、そっと悟空の額に唇を落とした。

「この子の打ち上げはいつですか？」

「ここにいるサイヤ人は全員3日後に打ち上げ予定です。」

「予定を変えさせてください。この子は今日打ち上げます。」

「はぁ、しかし、カカロットに見合う星はまだ……」

「私に候補があります。許可を頂けますか？」

「それでしたらどうぞ。」

私は老人に礼をして悟空を抱いたまま育児スペースから出た。これであの老人と会うこともない。あの老人には惑星ベジータの破壊を伝えてないからだ。フリーザ様曰く、増えすぎた兵士を減らすいわゆるリストラらしい。

「おや、咲夜。」

私が育児スペースを出ると声をかけられた。見ると、そこにはセリパ、トーマ、トテッポ、パンブーキンの四人がいた。

「皆さん、カナッサ星での任務お疲れ様でした。連勤ですか？」

「ああ、今度は惑星ミートさ。今度も大した星じゃないそうだから1、2日もありゃ終わ

る。」
「バーダックは一体？」
「あいつはカナッサ星で不意打ちを喰らっちまってな。今治療中さ。」
「そうですか…。」
　私は彼らと話ながら、これが彼らとの最後の会話になることに悲しみを抱き、顔を伏せた。胸元では悟空が心配そうな眼差しで私を見上げている。私は悟空の頭をそっと撫でて、意を決して顔を上げた。
「皆さん、いつもありがとうございます。」
「な、何だ？」
「どうしたんだい咲夜？いきなり。」
「ふふっ、いえ、言ってみたかっただけです。」
　私が笑うとセリパが「変な咲夜」と言い、それにつられて皆で笑った。そしてしばらく談笑し、セリパ達は惑星ミートへと飛び去って行った。きっとセリパ達は気づいてないんだろうな。私があのタイミングでありがとうと言った意味。私はセリパ達がいたから、今日この日まで戦うことができた。暗いフリーザ軍の中で、セリパ達という仲間がいたから今日まで踏ん張ることができたんだ。セリパ達がいなかったら……私は今腕の中にいる悟空をこうやって優しく抱き締めることだってできなかった。

でも……ごめんなさい。私は……私が生きるために、あなた達を見殺しにしなければならない。あなた達に救われるだけ救われて、何も返せずに恩を仇で返してしまう。ごめんなさい…そして…ありがとう。

「?あぅ～」

「…ありがとう、悟空。」

「きゃっきゃっ！」

私の頬を伝う一滴だけの涙を悟空が優しく拭ってくれた。私がお礼を言うと悟空はまたも嬉しそうに笑った。

私は悟空を自分の乗ってきた丸型宇宙船に乗せた。普通下級戦士の赤ん坊の派遣にはボロボロの凡用丸型宇宙船が使われるが、それだと安全性が極めて低い。最悪星に着く前に宇宙船が大破して赤ん坊が死亡するケースもある。それに比べて私の宇宙船は丸型ではあるものの安全性、速度、安定性、強度まで精密に計算され造られた最新式である。まず安全に地球まで辿り着けるはずだ。悟空を乗せた後、私はピッピッと行き先を設定する。

行き先：太陽系第３惑星”地球”

座標：４０３２・緑・８７７惑星

設定完了、と。

私は設定を終え、ドアの開閉スイッチを押すとプシューと音をたててドアが閉まった。窓から中を覗くと悟空は笑い疲れたのかすでにくぅくぅと寝息を立てていた。そして数秒後、将来重い運命を背負うドラゴンボールの主人公は地球へ向けて飛び去っていった。私は宇宙船が飛び去った後もしばらく空に向かって手を振り続けていた。

原作前、無印編・２０

▼

咲夜は地球へ旅立つ悟空を見送った後、フリーザの宇宙船が惑星ベジータの大気圏内に入ったのを確認して、フリーザの宇宙船に乗り込んだ。咲夜は不死身の肉体を持つが、フリーザのように宇宙空間で生きられるわけではないのだ。

惑星ベジータでフリーザの宇宙船を待つ間、咲夜はバーダックとの最後の会話も済ませた。バーダックは咲夜の口調がいつもと違っていることに気づき、さらにカナッサ星人の不意打ちで未来が見える能力を得たことで咲夜に不信感を抱いたが、咲夜が一貫して「何でもありません」と言うことでバーダックは釈然としないが惑星ミートへと飛び去っていった。

「フリーザ様、勝手な行動をとったこと、申し訳ありませんでした。」

「構いませんよ。惑星ベジータはあなたの元故郷ですからね。破壊する前に部下に故郷の空気を吸わせておくのは私の義務です。」
宇宙船のフリーザの部屋で頭を下げて謝る咲夜をフリーザは笑って許す。
フリーザに許しを得た咲夜はすぐに仕事モードへ切り換え、時を止めて一瞬でワインを持ってくるとキュポンとコルクを開けてグラスへ注ぎ、フリーザへ手渡す。そのワインをフリーザは微笑みながら受け取った。一年間フリーザの召し使いとして仕えた咲夜はフリーザがワインを欲しがるタイミングを熟知していた。
「フリーザ様、ドドリア、ただいま惑星ミートより帰還致しました。」
ウィーンと部屋の自動ドアが開き、ドドリアが入ってきた。ドドリアは左手を胸の心臓の辺りに当て、軽く頭を下げてフリーザに敬意を表す。
「惑星ミートにてバーダックチームのサイヤ人を皆殺しにして参りました。」
ドドリアはフリーザに報告しながらニヤリと笑う。しかし、そんな彼に横槍を入れる人物がいた。
「ドドリア様、今回ばかりはミスを犯しましたね。」
「何？俺は確かに……！」
「では、こちらのモニターをご覧下さい。」
咲夜だった。咲夜はドドリアにそう指摘すると右手の掌を上に向け、上品にモニター

を指す。そのモニターには宇宙空間を飛行する一台の丸型宇宙船が映されていた。それを見てドドリアはハッとする。その丸型宇宙船はバーダックの物だった。惑星ミートで仕留めたと思っていたが、バーダックはかろうじて生きていたのだ。

自分のミスに気づいたドドリアは恐る恐るフリーザの顔色を確認する。フリーザは窓の外をじっと眺めていて、ドドリアの位置からでは表情を読み取れない。

「す、すみませんフリーザ様!!すぐ片付けて参ります!!」

「結構ですよ、ドドリアさん。」

焦ったドドリアは慌ててバーダックの始末に向かおうとするが、それをフリーザが制止した。

「どうやらこのサイヤ人は惑星ベジータに向かっているようですからね。」

「フフフ、どの道同じ運命ということですか。」

ザーボンの言葉にフリーザは恐ろしい笑みを浮かべるばかりだった。

▽

バーダックが惑星ベジータに帰還した後、すぐに惑星ベジータを破壊する予定だ。具体的には軍で新開発した質量爆弾を実験も兼ねて使うつもりである。さすがに星をまるまる一つ破壊できるとは思えないが、少なくとも半分は消し飛ぶと見積もっている。

ドドリアが惑星ミートでセリパ達を殺したことを聞いた時、私は特に動揺しなかった。前々からこの日のことは覚悟していたし、彼女達との最後の会話も済ませた。悔いはもうない。

私はフリーザ様から飲み終わったグラスを受け取り、台車に乗せた。そして厨房に片付けようとしたその時、部下の一人が慌てた様子でフリーザ様の部屋に駆け込んできた。

「一人のサイヤ人がこの船に奇襲を仕掛けています!!」

「何？咲夜さん！」

「はっ。」

フリーザ様に指示され、私は近くのパネルをカタカタと叩き、フリーザ様の望む映像をモニターに表示する。

そこには何百人といるフリーザ軍の兵士相手にたった一人で立ち向かうバーダック

の姿が映っていた。バーダックは近づく兵士を殴ったり蹴ったりして弾き飛ばし、遠くの敵はエネルギー波で消し飛ばしながら真っ直ぐにこの宇宙船を目指していた。
「ただいま兵士達が全力で対処していますが、見ての通り甚大な被害を受けておりまして……!!」
「ザーボンさん……上部ハッチを開けなさい。」
部下は早口に現状を報告するが、フリーザ様は報告に全く耳を貸さずザーボンに上部ハッチを開けるように指示する。
「え？しかし、まだ部下達が……」
「……」
「りょ、了解しました！」
ザーボンはまだ外には大勢の部下がいることを進言するが、フリーザ様は無言で圧力をかけた。ザーボンはフリーザ様が本気であることを感じ取り、駆け足で上部ハッチを開けにいった。私は時を止めてフリーザ様がいつも使っているマシンを用意してフリーザ様の後ろに置く。フリーザ様はそのマシンに乗って上部ハッチへと向かう。私はそれについて行った。

フリーザ様と私がちょうど到着したタイミングで上部ハッチはウィーンと開いた。フリーザ様と私はゆっくりと上昇し、惑星ベジータの大気圏内へ出る。
「フ、フリーザ様……!!」
「フリーザ様が……!!」
フリーザ様と私が外へ出るとバーダックを止めようとしていた兵士が全員静止してこちらを見た。フリーザ様の存在感はそれほどでかい。
一方兵士達が皆フリーザ様の登場に固まる最中、バーダックはお望みの人物の登場に不敵な笑みを浮かべた。バーダックはフリーザ様の隣の私をチラッとだけ見ると、フッと笑った。私との最後の会話の際感じた不信感がたった今腑に落ちたらしい。
「ヘヘッ、これですべてが変わる……この惑星ベジータの運命……この…俺の運命……カカロットの運命……」
バーダックは右手をパッと開き、気を集中し始めた。右目でバーダックの戦闘力を計測してみると、今までにない程の高まりを見せている。
「そして……貴様の運命もッ!!」
ピカッ!と、バーダックの右手が光った。次の瞬間バーダックの右手には、後に悟空の得意技となるかめはめ波を彷彿とさせる青白いエネルギー弾が現れた。そして高まりに高まったバーダックの最終的な戦闘力は……

「……３４０００…！」

「ほう……」

バーダックは最期の最期で私をも越える戦闘力を手に入れた。原作でのバーダックの最終的な戦闘力は１００００程度だったはずだが、もしかしたら原作でもこれ程の戦闘力だったのかもしれない。正直自分の３００００という高い戦闘力に自信を持っていた私はかなり驚いた。さすが戦闘民族サイヤ人。倒すべき敵を前にするとこうも戦闘力が跳ね上がるのか。

しかし、フリーザ様はバーダックのあり得ない戦闘力の上昇に対して驚くこともなく、スッと右手の人差し指を立てた。

「これで最後だぁぁーーーー!!!!」

バーダックはフリーザ様に向けて自身の全力のエネルギー弾を放った。強力なエネルギー弾はものすごいスピードでこちらへ向かってくる。

「ふふふ……あーっはっはっはっは!!!」

フリーザ様は突然大声で高笑いをした。それと同時にフリーザ様の指先からまるで太陽のような凄まじく、そして巨大なエネルギー弾が一瞬にして構成された。バーダックの渾身のエネルギー弾はフリーザ様の造り出した太陽にいとも簡単に飲み込まれる。

「なっ!?何っ!!?」

「さぁ……！美しい花火が上がりますよ!!」
フリーザ様はピッと右手の人差し指を曲げた。すると太陽はゆっくりと惑星ベジータの向かって落ちていく。
「フ、フリーザ様ぁーーーー!!!」
太陽は途中、たくさんの兵士達を飲み込み、消し炭へと変えていった。太陽は巨大なため、バーダックのものと比べてゆっくりと落ちているので、バーダックは避けようと思えば避けられるはずだが、余程渾身の一撃が通用しなかったことがショックだったのか、単純に体力が残ってないのか、バーダックは避ける気配がない。
「カカロットよぉーーーー!!!」
やがて、母なる星のためにたった一人で巨大な敵に立ち向かった戦士は惑星ベジータと共に宇宙のチリと消えた。
「あーっはっはっはっは!!素晴らしい!!ほら！見てごらんなさい！ザーボンさん！ドドリアさん！咲夜さん！こんなにも美しい花火ですよ!!」
フリーザ様は惑星ベジータの大爆発を見てご満悦に高笑いする。私はそんなフリーザ様の後ろで今世での故郷の最期をしっかりと目に焼きつけていた。

「!……これは……」

惑星ベジータの爆発が収まるとフリーザ様は足早に宇宙船の中へと戻っていった。私も戻ろうとした時、私の足下に赤い長目のリストバンドが落ちていることに気がついた。私はそれを拾い、バーダックが付けていたものだと分かった。爆風でうまいこと飛んできたのだろうか。ピンポイントで?私の足下に?そんな偶然があるのだろうか。

「バーダック……あなたは……」

もしかして、このリストバンドはフリーザ様にエネルギー弾を放つ時、バーダックが一緒に投げたんじゃないだろうか。だとしたら、もしそうだとしたら、バーダックは私がセリパ達を見殺しにしたことに苦しんでいることに気づいてたのかもしれない。あの時私を見て笑ったのは、不信感に納得したからじゃない、私の気持ちが分かったからだったんだ。こんな…裏切り者の私を、バーダックは分かってくれたんだ。

やめてよ……やっと踏ん切りがついたのに……最後の最後で…こんなことして……

私はバーダックのリストバンドを短目に切り、両腕にしていたレースの付いた白いリストバンドを外してバーダックのものを両腕に付けた。ついさっきまでバーダックが付けていたそのリストバンドは血で少し湿っていて、そしてとても温かかった。

「うう……うう……」

その温もりを感じてついに私は我慢の限界が来てその場に泣き崩れた。静寂な宇宙に私のぐずもった泣き声だけが木霊した。

Ｚ・ナメック星編・１

◆

「フリーザ様、只今シャープ星より帰って参りました。少し手間取りましたが、３日間で奴等を降伏させました。」

時の流れとは早いもので、フリーザ様が惑星ベジータを滅ぼしてからもう約２０年の月日が流れた。あの事件で元々少数民族だったサイヤ人はほとんど宇宙のチリと消えて残ったのはフリーザ様が意図的に残したベジータとその側近のナッパ、後はたまたま他の惑星を攻めていたので助かったラディッツだけということになっている。悟空が地球に向かい難を逃れたことは私しか知らない。

生き残った三人のサイヤ人には惑星ベジータは巨大隕石が衝突して滅んだと嘘をついた。聡明なベジータは自分達がいない間に巨大隕石が衝突、ベジータ王らがそれに対

し何の対策もしなかったことに違和感を感じていた様だが、フリーザ様がサイヤ人を滅ぼす理由が思い浮かばなかったらしく深くは考えなかった。

さて、今その三人はすっかり大人に成長したベジータを筆頭に、フリーザ様の面前で跪いている。彼らは今、シャープ星という星の反乱を静めて帰って来た所だ。シャープ星はツフル人程ではないものの、そこそこ高い科学力を持つ星なのでサイヤ人が三人いても少し苦戦したようだ。少し力を入れすぎて大地を大きく削ってしまったらしいがまあ、許容範囲だ。

「……そうですか。あんな星に3日もね……。」

ベジータの報告にマシンに乗り、私が注ぐワインを飲むフリーザ様は目をそっと閉じてそう呟く。小さな声なのでその呟きは隣りにいる私にしか聞こえない。

片やフリーザ様の呟きが聞こえなかったナッパやラディッツなどは期待を隠しきれない顔でこちらを見ている。今回の仕事で何か褒美を賜えると思っているようだ。

「……なるほど、分かりました。下がってよろしいですよ。」

「なっ!?おいっ!ちょっと待てよ!!」

しかし、目を開けたフリーザ様の口から出たのは下がってよろしいという言葉のみ。褒美が何もないと分かったナッパがバッと立ち上がって抗議する。ナッパが立ち上がると同時にザーボンとドドリアがフリーザ様の前に立つ。

「俺達は体ボロボロにして帰って来たんだぞ!!それを……!!」
「……フン、ザーボンさん、あの星を征服するのに何日かかりますか?」
「はい、1日あれば充分かと。」
「そうでしょうね、あんなちっぽけな星程度…。ほほほほほ。」
激昂するナッパを尻目にフリーザ様はザーボンへ征服に必要な日数を尋ねる。ザーボンは笑いながら1日あれば充分と宣言した。その言葉にナッパは何も言えなくなってしまう。
だが実際ベジータ達の働きは本来は充分褒美に値するものである。シャープ星クラスの星をたった三人で、たった三日で征服したとなれば、他の兵士なら星レベルの褒美が与えられる程の活躍だ。そう、〝他の兵士〟ならば。
ではなぜベジータ達は褒美を与えられないのか。それはベジータ王がフリーザ軍にサイヤ人を登録する際、その能力を誇張表現し過ぎたことに原因がある。
様々な種族が戦闘員として働くフリーザ軍では、活躍の基準線なるものが種族ごとに決められている。戦闘向きの種族は高く、そうじゃない種族は低くといった具合にだ。そうしないとどうしても戦闘向きの種族のみが活躍してしまうからだ。
ではその基準線はどうやって決めるのか。それはフリーザ軍に登録する際にその種族のリーダーに書かせるアンケートを元に決められる。そのアンケートは種族の能力

がどれくらいあるのかを調査するためのものだ。
　そのアンケートをベジータ王はサイヤ人の力を知らしめるためか知らないが、かなりオーバーに記入したのだ。そのせいでサイヤ人が褒美を得るには死ぬ気で頑張らないといけなくなってしまった。ちなみに基準線は一度決めたら変更できない規則なのでベジータが変えようと思っても変えられない。
　ちなみにナッパはベジータ王が誇張表現することを賛成していたエリート戦士の一人らしい。だから今目の前で拳を握りしめ、ぞんざいな扱いを受けていると怒りに燃える彼だが、実は自業自得だったりする。怒りたいのはとばっちりを受けているベジータとラディッツだろう。
「こっ……!!この野郎っ!!!」
　何も言い返せなくなったナッパがフリーザ様目掛けて拳を振り上げ走り込んで来た。私は時を止めてワインボトルをワゴンの上に置き、ナッパの前に出る。
「やめろナッパっ!!!」
「っ!!」
「……」
　ベジータがナッパにそう叫ぶのと、私がナッパの顔の前に右手を広げるのはほぼ同時だった。ベジータの制止が後少し遅ければナッパは間違いなく私の攻撃を受けていた

だろう。
「……フリーザ様、失礼致します。」
「ほほほ、ええ、次の働きも期待していますよベジータ。」
「ベジータ王子、食堂に食事を用意しています。お口汚しですがよろしければどうぞ。」
「そうか、行くぞナッパ、ラディッツ。」
「……ちっ、ああ。」
「あいよ。」
　ベジータはナッパとラディッツを連れ、食堂に向かって歩いていった。出会った当初はただのワガママお坊ちゃんだったベジータがしっかり二人をまとめているのを見ると成長したんだなぁと少し感動してしまう。
「フッ、やはりベジータの奴を残したのは正解だったようですね。」
「ほっほっほ、そうですね。二匹余計な猿が生き残ってしまいましたがその猿達も上手くまとめているようです。」
　フリーザ様はそう言って不敵に笑う。実際ベジータはナッパとラディッツの二人をとても上手くまとめている。ベジータが二人に的確な指示をしているおかげでチームとしては非常によくできている。が、しかし、ベジータ達三人にはあまりにも力の差がありすぎる。ベジータの戦闘力は１８０００、それに対してナッパは４０００程度、ラ

ディッツに至っては１５００しかない。あまりにも差があるため、ベジータは自分の力を充分に発揮できていない。ナッパとラディッツの力に見合った星を攻めなければいけないからだ。そのためベジータの力はある時からまったく進歩しなくなっていた。なまじ天才と称される才能がある分、フラストレーションが溜まるだろう。

　にもかかわらずベジータは二人をしっかりまとめている。そこは本当に脱帽する所だ。プライドばかりに目がいったダメ親父とは大違いである。

「さて、咲夜さん、ザーボンさん、ドドリアさん、行きましょう。今日中に片付けなければいけない書類が溜まってますからね。」

「「はっ！」」

　私達はフリーザ様に付き従って部屋を出る。宇宙を支配するフリーザ軍の仕事は実に多忙なのだ。

Ｚ・ナメック星編・２

◆

「こちらがご注文の光線銃２００丁でございます。」
「はい。確かにお受け取りしました。」
　ここは惑星レビ。ツフル人に次ぐ科学力を持った惑星ベジータと大きさ的にはほぼ変わらない星だ。ツフル人亡き今、この星が全宇宙の科学界を牛耳っていると言っても過言ではない。
　そんな星で私は箱一杯に詰められた光線銃を箱で二つ分受け取った。原作でフリーザ軍の一般兵が使っていた手にはめて光線を撃つあれである。この光線銃は主に気功波が撃てない新人の兵士に支給される。フリーザ軍はこの光線銃のほとんどをこの惑

星レビから輸入している。惑星レビが科学界で輝けるのもフリーザ軍という巨大な取引相手がいるからでもある。

「……相変わらず品質は良好ですね。」

「ふははっ！当然だ！我が星の科学力を持ってすればこんなことは朝飯前よ！」

私が光線銃の一つを手にとり、いじくりまわして品質を確認すると取引に立ち会っていた惑星レビの王が豪快に高笑いをした。頭頂がハゲた頭に王冠を被り、サンタクロースの髭を生やした老年の男だ。

「どうだ咲夜！心は決まったか!?ワシの息子の嫁に来い!!」

「…結構なお話ですがお断りさせていただきます。」

王の結婚の誘いを私はもう何度口にしたかも分からない決まり文句で丁重にお断りする。惑星レビの王子は宇宙レベルで見てもかなり顔面偏差値が高いイケメンだが、あいにく私は誰にも嫁ぐ気はない。

私は仕事で色々な星を訪れ、そしてその度にこうやって権力者に求婚されている。求婚と言えば聞こえはいいが、皆がイメージするような甘酸っぱいものではなく、フリーザ様との繋がりを持とうとするものがほとんどだ。

知っての通りフリーザ軍は今や全宇宙を支配する最も勢力がある組織だ。当然権力者達はフリーザ軍と繋がりを持とうとする。簡単に且つ強固な繋がりを得る方法は今

も昔も変わらず政略結婚である。だが、権力者達は誰もフリーザ様自身に結婚を申し込むことはない。恐れ多いし、下手に求婚して機嫌を損ねてしまったら取り返しがつかないからだ。触らぬ神に祟りなしというやつである。ではどうするかと悩む権力者達は自然とフリーザ様の次に位が高い私に目をつけるわけである。それゆえに権力者達は獣のように私に求婚してくるのだ。私の部屋は各惑星から送られた見合い写真で一杯になっている。まあ、その大半は見ることすらしていないが。

「そうか…。まあ、気が向いたらいつでも言うがいい！すぐにでも式を挙げてやる！」

「はい、ありがとうございます。」

そう言って王は「ではな！」と高笑いと共に去って行った。多くの権力者はしつこく食い下がって結婚を勧めてくるのだが、惑星レビの王は結構あっさり引いてくれるのでありがたい。こういう所に私は好感を持っている。

……ひょっとしてこれも王の作戦なのだろうか。確か心理学にこういうのがあった気がする。確か〝単純接触効果〟だったか。下手に長い時間相手と会話をするより、短い時間の会話を何度も繰り返すほうが相手の好感を得やすいというやつだ。もし王がそれを狙っているのだとしたらかなりの策士である。ここは科学が発達した惑星レビだ。当然心理学だって発達している。あり得ない話ではない。

なんて、そんなことを考えてしまう辺り私もずいぶん歪んだものだ。

苦笑しながら箱一杯の光線銃を宇宙船に積み込んでいると右耳のイヤリング型通信機に通信が入った。
「はい、こちら咲夜です。」
『やあ、咲夜。声を聞くのは久しぶりだなぁ。』
「あ、ギニュー隊長ですか？お久しぶりです！」
通信機から聞こえてくる久しぶりのギニュー隊長の声に私は柄にもなく嬉しそうな声と笑顔をしてしまう。そんな私にさっきまで取引をしていた商人はちょっと……いやかなり苦い顔をしている。自分の星の王子との結婚を無表情で断った女が通信機で見ず知らずの男と笑顔で話していたらそりゃ複雑な気持ちになるだろう。だが、私とてお互い仕事続きで中々会えなかったギニュー隊長の声を久しぶりに聞いたのだ。これくらいは許してほしい。
「何かご用ですか？」
『あぁ、実は久々にフリーザ様から休暇を頂いてな。』
「まぁ、本当に久々ですね。かれこれ二年ぶりくらいですか？」
あまり取引先の商人の機嫌を損ねるのは得策ではない。私は未だにしかめっ面をしている商人に別れを告げ、光線銃を宇宙船に運び込む作業をしながらギニュー隊長と会話をする。

『あぁ、もうそんなになるのか…。とにかく、私達は休暇を頂いたんだ。そこで、リクーム達が軍の女の子を誘って盛大に騒ごうと言い出したんだが…』

成る程、合コンというやつか。意外かもしれないが、ギニュー特戦隊の面々は結構モテる。性格に若干難があるものの、顔はそこそこ整っていてキャリアだって文句なし。冷静に見てみれば彼らは中々の優良物件なのだ。え、グルドも？なんて思うだろうが驚くなかれ、フリーザ軍にはマニアックな女子も多いため、彼も彼でかなり人気がある。

『来る予定だった女の子が一人、急な任務が入っちまってな、女の子が一人足りない状態なんだ。どうしようか困ってた所、真っ先にお前の名前が挙がってな。ほら、お前に妙になついてる女の子がいるだろ？』

「あぁ、レナのことですか。」

〝レナ〟はフリーザ軍で戦闘員として活躍する女の子である。入軍したのは今から約１０年前で、当時まだまだヒヨッ子だった彼女を指導したのは私である。ちょうどその日、担当する仕事を終わらせて暇を持て余していた私は気まぐれで彼女に指南したのだ。数回とはいえ任務を共にしたこともある。そのせいか私は彼女にとてもなつかれている。可愛い後輩なので私も彼女の前では良い先輩でいようと心掛けている。

『そんなわけでお前にぜひ来てもらいたいんだが、どうだ？明日空いてるか？』

「明日ですか？確か午後からなら空いています。」

『おぉ！そうか！良かった！おっと、そうだ。そういえばフリーザ様が近々幹部達を召集するとおっしゃっていたぞ。』
「？何か大型の任務ですか？」
『詳しいことは分からんが、フリーザ様の長年の夢が叶うかもしれないチャンスらしい。まぁ、詳細は召集の時に説明されるだろう。じゃあ、明日な。』
「はい、では明日。」
　その会話を最後に通信機がプツッと切れる。今の時期に召集……、いったい何だろう？幹部達を集める程の強大な敵はいない。かといってフリーザ様のお眼鏡にかなう星は最近見つかっていない。
　まあ、ギニュー隊長の言う通り、詳しい事はその時に説明されるはずだ。今はあまり気にしないでおこう。
　私はそう割り切り、宇宙船の起動スイッチを押して惑星レビを後にした。明日久しぶりに会えるギニュー特戦隊の皆に心を躍らせながら……。

Ｚ・ナメック星編・３

▼

「「とっくせんたいっ♪　とっくせんたいっ♪」」

惑星フリーザのフリーザ様の城下町、そこにある大きめの居酒屋にて私達は騒いでいた。バータ達がマイクを持って気分よさげに歌い、私達女子組が手拍子でそれを盛り上げる。

「きゃ～！　皆さんお上手ですっ！」

「ふふん、当然だ。」

「ささ、お酒をどうぞ。」

歌が終わると女の子たちはすかさず彼らの杯に酒を注いだ。まさに合コンと言った雰囲気だ。女の子達は皆それぞれ狙っている特戦隊メンバーに寄り添って楽しんでいる。

「えへへ～♪」

「ちょっとレナ、少し離れてください。すみませんギニュー隊長。」

「いや、構わんさ。」

もちろんここは私もギニュー隊長にお酌をせねばならないのだが、赤い長髪の少女レナに引っ付かれてそれが上手くできなかった。寛大なギニュー隊長はそんな私の非礼を気にせずに自分の酒を豪快に飲んだ。

「ザーボンやドドリアから聞いたぞ。お前、相変わらず安定して軍トップクラスの成績をおさめているそうじゃないか。それはその子のおかげでもあるのだろう？　なら今日くらい羽目を外しても構うまい。」

「それはそうですが……。」

このレナという少女は、赤い髪に白いシャツに黒のベストを着ていて、東方キャラの一人、紅魔館の大図書館の司書を務める「小悪魔」にそっくりだ。その見た目にそぐわず彼女は情報や事務作業などの仕事にめっぽう強かった。そんな彼女のサポートもあって私は他星への侵略はもちろん、配下の様々な星々から色々な取引を結ぶことに成

功し、フリーザ軍がより強い組織になるために貢献できている。
「ふへへ～……♪　咲夜さん……♪」
　私は自分の腕に寄りかかり、いつの間にか寝てしまったレナの頭を撫でた。確かにギニュー隊長の言う通り、この子にもたまにはこんな日があってもいいかもしれない。すっかり和んだ空気でのんびりしていると、私は先日ギニュー隊長が通信機で言っていたことを思い出した。
「そういえば隊長、フリーザ様の招集命令の日にちっていつなんです？」
「明日だ。」
「……え？　お酒飲んでいいんですか？　私は体内のアルコールを速やかに分解できますが。」
「まあ本来は決して許されることではないが、我々とて二年ぶりの休息だ。寛大なフリーザ様ならば許して下さるだろう。」
「……そういえば一か月前、隊長たちが任務の帰り道にケーキバイキングに立ち寄って帰還が遅れた件、フリーザ様は大変お怒りでしたが…、大丈夫なんですね？」
「……お前達ぃ!!　明日のことを忘れたかぁ!!　フリーザ様に不快な思いをさせるわけにはいかん！　酒は程々にするんだぁ!!」
　どうやら大丈夫ではないらしい。ギニュー隊長は慌てて隊員達からお酒を取り上げ

てぶーぶーと文句を言われていた。

▽

「…ギニュー特戦隊の皆さん、何ですかその有様は?」

そして合コンの次の日、私、ザーボン、ドドリア、そしてギニュー特戦隊の面々がフリーザ様の王室に整列していた。だが、あれから隊員達の押しに負け、結局朝まで飲み続けてしまったギニュー特戦隊は二日酔いでフラフラだった。その光景を見たフリーザ様の口元がピクピクと震える。心なしか、額に赤い怒りマークが浮かんでいるようにも見える。

「も、申し訳ありませんフリーザ様ぁ！　このギニュー、やはり心を鬼にしてでも部下達を止めるべきでした!!」

そのフリーザ様の姿にギニュー隊長は床にひびを入れる程勢いよく土下座した。そ

の床を直すのは私なんだからあまり無茶はしないでほしい。
「た、隊長……！　すみません、俺達が調子に乗ったばっかりに…」
「うぅ～、隊長～。」
「いや！　あろうことかフリーザ様にこのような醜態を晒してしまったのは間違いなく隊長である俺の責任！　お前達、ここはせめてもの贖いとして俺達の最高のダンスを披露するのだ!!」
「「おお～っ!!」」
　感極まった隊員達が泣きながらギニュー隊長と共に踊り始める。その姿にザーボンやドドリアは呆れてため息をつくが、私は自業自得とはいえ体調不良の中いつも以上のキレと結束力を見せるそのダンスに感動していた。
「ったく、こいつらはいつまで経っても……」
「ダンス…私にはただの千鳥足にしか見えんのだが……」
「素晴らしいですよ皆さん！　以前見た時よりレベルが格段に上がっています。」
「……咲夜、前から思っていたがお前のセンスはおかしいぜ。」
「……はぁ～、もういいです。何だか怒るのもバカバカしくなってしまいました。今回のことは不問にしてあげますから楽になさい！」
「「はっ!!」」

フリーザ様の一声でギニュー特戦隊は再びビシッと整列した。それを確認したフリーザ様はそれまでの空気を払拭するように「オホンッ！」と咳払いをした。
「では、全員揃った所で本題に入りましょうか。まずは、この音声を聞いてください。」
フリーザ様がスカウターのボタンを押すと、ここにいる全員の通信機に音声が流れ始めた。激しい轟音と爆発音が繰り返される。どうやらどこかの星で行われた戦闘の記録のようだ。
「フリーザ様、これは？」
「地球という辺境の惑星での戦闘記録です。咲夜さん、あなたの部下のレナさんの諜報チームが提出してくれたものですよ。」
「そうでしたか。」
「特別ボーナスを出すと伝えておいてください。」
「ありがとうございます。彼女も喜びます。」
フリーザ様の心遣いに私は深く礼をした。
「してフリーザ様、この記録が何だというのです？」
「重要なのは戦闘そのものではありません。皆さん、この音声を現時点から五分程飛ばしてください。」
ギニュー隊長の疑問にフリーザ様が答えた。私達はその指示通りに音声記録を飛ば

す。すると過程が飛ばされ、勝負は決着の時だった。
『バカな……この俺が……こんな奴らに……』
「……っ！」
そして聞こえてきた敗北したであろう者の声に、私は顔を伏せ、皆に分からないように表情をゆがめた。

そうか、ついにこの時が来たのか。
私はそんな気持ちでいっぱいだった。この記録は私の親友の息子であり、子供の頃から面倒を見てきたラディッツの死の知らせでもある。分かっていたことだけど、いざその瞬間になるとやっぱり悲しかった。
「この声は…ラディッツですか？」
「ええ、そうですザーボンさん。どうやらラディッツは、”カカロット”と呼ばれる生き残りのサイヤ人を仲間に引き入れようと地球を訪れ、その際、予想外の力を持つ原住民とそのカカロットに敗れたようなのです。」
ザーボンの確認にフリーザ様が頷く。しかし、皆はその戦闘自体に興味は無いようだった。なぜならフリーザ様が辺境で行われた戦闘に興味を示すはずがないと分かっているからだ。本質は別にある。それはここにいる全員が理解していた。

「では皆さん、この男の話をよく聞いてください」
『この星にはドラゴンボールという便利なものがある。そいつに願えばどんな望みも叶っちまうのさ。死人を生き返らせることだってな。』
　通信機からは聞き馴染みのない声が聞こえてきた。私だけがその声の主がピッコロであることが分かった。悟空のライバルの一人、大昔に地球に逃れたナメック星人だ。
「ドラゴンボール…噂の願い玉のことですかい？」
　通信の声を聞いたドドリアがフリーザ様に確認をとる。それにフリーザ様が頷いた。
「フリーザ様、もしや今回我らを召集したのは…」
「ええ、このドラゴンボールとやらについてです。もしこれが本当なら、私の長年の夢を叶えることができます。」
　フリーザ様は興奮を抑えるようにギュッと拳を握る。
「しかしフリーザ様、願い玉は単なるお伽噺。正直、この音声データだけでは信憑性は……。」
　ギニュー隊長の進言にフリーザ様は「ええ、もちろん」と頷きながら手を後ろに組む。

「そこは私もギニューさんと同じ意見です。軍を編成し、ドラゴンボールを奪いにいくにしても、実例を確認しておきたいものです。無駄足は御免ですからね。」

「そこで。」と、フリーザ様は私達に向き直す。

「レナさんがこの記録を詳しく解析してくれました。どうやらこの戦いで、ラディッツの他にカカロットも戦死したようです。この者は仲間からかなり信頼されているようで、近い内にドラゴンボールで蘇らせるつもりのようです。また、ドラゴンボールを求めてかベジータ達が地球に向かっています。」

「なるほど…では。」

「そうです、咲夜さん。しばらく地球の様子を見ます。もしドラゴンボールの効力が本物だと判断された場合、地球、もしくは願い玉の噂があるナメック星に向かいますよ。咲夜さん、地球の様子を観察できるように手配してくれませんか？　次は音声だけでなく、もっと詳細な情報が欲しいですからね。」

「畏まりました。」

「進展があったらまた連絡します。それまで通常業務に専念してください。」

「「はっ！」」

確実に物語の、時代の流れが迫っている。私は何となく肌でそう感じた。

Ｚ・ナメック星編・４

▽

「え？　地球の偵察ですか？」

フリーザ様の招集の翌日、私は惑星フリーザの軍基地内部の諜報班プラットフォームにいた。昨日の指示通り、地球を偵察する手配をするためだ。フリーザ軍でも特に優秀な諜報チームを率いるレナが私の要求に首を傾げる。

「ええ、子細は今話した通りです。どんな願いも叶えるというドラゴンボールなるものが、フリーザ様の求めるものかどうか、それを見極めるためにスカウターの音声以外の情報が必要になります。」

「それは分かりました。ですが、この星とその地球という星とでは距離が随分と離れています。いつもの偵察のように、現地に諜報員を派遣するわけにはいかないでしょう。」

レナが言うことは尤もだ。距離が遠ければ遠い程諜報にとっては不都合となる。フリーザ軍の諜報は、目的の星の原住民に警戒心を抱かせない見た目の諜報員が何人かチームになり、その星の生活に溶け込みながら情報を集める。その時の通信は目立たないようにスカウターではなく、私が着けているようなイヤリング型の通信機を使用する。

その間、軍の支援は当然あるわけで、場合によっては現地での戦闘も起こり得る。その時距離が離れていれば支援が遅れるし、最悪孤立無援になる可能性もある。そんな理由もあって今回地球に人員は送れない。

「ええ、それは分かっています。ですがレナ、確かあなた技術班から偵察用超小型ロボの試作機のモニターを頼まれていたでしょ。」

「へ？　ああ、これですか。いや～すっかり忘れてましたよ。」

照れくさそうに頭の小さな羽根をパタパタさせながらレナが懐から指輪ケースのような小さな箱を取り出した。その箱がゆっくり自動で開くと中に虫のようなフォルムのロボットが入っていた。形状は原作でドクターゲロが悟空達を偵察するのに使っていたスパイロボに酷似しているが、目の前のそれはさらに小さい。原作のスパイロボは

情報収集以外に悟空達の細胞を採取する目的があったが、この偵察ロボはその必要がない。完全に情報収集に特化させることができるためにこのサイズを実現したのだろう。ブルマやドクターゲロといった地球の一部の天才達が異次元すぎるだけで、全宇宙から精鋭を集めたフリーザ軍の科学力も相当高いレベルなのだ。

「ですがこれを使うんですか？　確かにこれなら現地に離すだけで支援は一切必要ありませんが、試作機なので宇宙空間を移動する機能がありませんから誰かが現地に直接行く必要がありますよ。」

「その辺は問題ありません。私が行ってきますから。」

「へ？　でもここより比較的近い位置にいたベジータさん達でも1年程かかる距離ですよ？　咲夜さんがそんなに長い時間フリーザ様の下を離れるわけには…」

「大丈夫です。1年くらい前に私専用の中型宇宙船を買いましたから。あの船なら片道1か月くらいで済みます。それくらいの期間なら〝サイバイ執事〟達に任せられます。」

サイバイ執事とは、私が不在の時にフリーザ様の身の回りのことを任せられるように、私が特別に訓練したサイバイマン達だ。東方の世界で本来咲夜が働いている紅魔館ではその辺の妖精をかっぱらってきて家事の仕方を訓練し、〝妖精メイド〟として雇っていた。それにあやかって私も育ててみたのだ。私がフリーザ軍で働き始めた頃から

育てている古参のサイバイマン達数匹を司令塔に、たくさんのサイバイ執事達が私の抜ける穴を埋める。さすがに戦闘力までは補えないが、その代わり彼らは知能がとても発達するように育ち、複雑な命令も理解できる。最初はそんなでもなかったのだが、代を重ね、何十年も育てている内にそのように変化した。

サイバイマンは本来使い捨ての兵士として使われるので大抵が産まれたその日の内に命を終える。そのため何十年も訓練を積むとこんなにも進化することは想定外だったようで、この結果を報告した時、フリーザ様が予想外の結果に大笑いしていたことを思い出す。

「サイバイ執事…あの働き者達ですか。確かにそれなら安心ですが……何故咲夜さんが？　他の者に任せられない理由でもあるんですか？」

レナの質問に私は少し顔を伏せながら答える。

「ラディッツが……あの子が地球で戦死したらしいのです……。」

私の暗い声にレナも少し表情を曇らせる。

「そうなんですね…。じゃあ咲夜さんは…」

「ええ、せめて私があの子を弔ってあげねばなりません。あの子は下級戦士だけどバーダックの息子で、あの子が子供の頃から成長を見てきた戦士ですから。」

そう、ラディッツもまた、サイバイ執事達と同じように私が育ててきた。惑星ベジー

タが存在している時から面倒を見てきたサイヤ人の子供、その生き残りがラディッツなのだ。彼が年齢を重ねるにつれてやんちゃ坊主から立派な戦士の顔に変わっていく過程も見てきたし、圧倒的な強さだった父バーダックの息子でありながらそれに遠く及ばない自分の戦闘力に悩んでいたことも知ってる。名も知らない兵士が死んだのではない。ラディッツの死は私にとって息子の死と言っても過言ではない。

本当はこの死もなんとか回避させてやりたかった。だがラディッツがいつどのタイミングで地球に行くのか分からず、フリーザ様の側近という立場上中々自由に行動するわけにはいかず、それは叶わなかった。

だからこそ、せめてラディッツは私の手で弔ってやりたい。

「…分かりました。そういうことならこのロボ、存分にお使いください。ちょっと待ってくださいね。」

レナは偵察ロボを箱ごと私に手渡すと机の引き出しからタブレットを取り出した。そして目にも止まらぬタイピングで偵察ロボの起動プログラムを作動させると、偵察ロボは一瞬緑色のランプが点いたかと思ったら、ブ～ンと私の周りを飛んで服の襟に止まった。この形状といい、サイズといい、フォルムといい、完全に蚊にしか見えない。素晴らしい溶け込み様だ。

「はい、準備完了です。後は咲夜さんが地球に降り立つだけで勝手にそのロボが偵察を

開始しますよ。電池も太陽光式なので補給も必要ありません。」
「ありがとうございますレナ。では、行ってきます。」
「はい、気を付けて行ってきてください。」
私は笑顔で送り出してくれるレナを背に、諜報班プラットフォームを後にした。

▼

所変わってここは軍基地内部の宇宙船飛行場。ここでは私の宇宙船の出発準備を整えていた。燃料の補給やメンテナンスを終えた青いカエル型の宇宙人技師が私に話しかける。
「咲夜様、出発準備が完了しましたよ。」

「ありがとうございます。」
　私が技師に礼を言うと同時に宇宙船からぶかぶかの執事服を着たサイバイマンが二匹出てくる。私が育てたサイバイ執事達だ。
「あら、食料・衣類を積んでくれたんですか？」
「ギィ～！」
「ギギィ～♪」
「ありがとう。あなた達も下がっていいですよ。」
「「ギギィ～♪」」
　彼らは上機嫌に笑いながらハイタッチして宇宙船から降りる。ぶかぶかの執事服も相まってその様は完全に異星人の子供といった感じだ。私はそんな彼らとすれ違って宇宙船に乗り込む。
「では行ってきます。あなた達、フリーザ様をよろしくお願いしますね。」
「「ギッ!!」」
「どうぞお気を付けて。」
　私は技師とサイバイ執事達に挨拶をして扉を閉めた。操縦席に座り、地球の座標を入力すれば宇宙船は瞬く間に飛び上がり、地球を目指して高速巡行を開始する。後はもう自動運転だ。1か月後には世界は違えどもう一つの故郷地球に到着し、「地球は青かっ

た」という名言を言える。到着までやることがないため一息つこうとシャワー室へ向かい、服を脱いで蛇口をひねった。冷水のシャワーが私の白い肌を滴り落ちる。

「地球……か。」

ドラゴンボールの物語において様々な戦いの舞台となった地球。その星にラディッツが降り立ち、ベジータ達が向かっているということは本格的に原作に私達フリーザ軍が介入していくことになる。このまま原作通りに物語が進めばフリーザ様はナメック星で悟空に倒され、当時それしか選択肢がなく成り行きで入隊したフリーザ軍から解放されることを意味する。数十年という歳月の末についにここまできた。だというのに

「……。」

私が思っていたよりも、いい気持ちはしなかった。それどころか、ザワザワモヤモヤと不安と焦りに似た嫌な気持ちが胸に広がっていく。この気持ちは、まだツフル人が存命していた頃、原作知識からいつサイヤ人が攻め込んでくるのか気が気じゃなかった時のものに似ている。ラディッツの死に、自分の想像以上にショックを受けているのだろうか。

せっかくドラゴンボール世界の地球に行けるというのに、私は終始暗い気持ちのままだった。

Ｚ・ナメック星編・５

▼

「う、ああ……あ……」
「こ、これは……」
はるか上空で地球全土を見守る神の神殿。今ここは未だかつてない脅威に見舞われていた。

事の発端は約1か月前、宇宙から戦闘民族サイヤ人であり、悟空の兄を名乗る男が地球に襲来した。その男、ラディッツは悟空とピッコロが手を組むことで何とか撃退したが、それから1年後にはラディッツより遥かに強いサイヤ人が二人、地球を攻めに来るのだという。その侵略に対抗すべく、地球ではあらゆる場所で力ある戦士が己を鍛えていた。ラディッツ戦で死んでしまった悟空は銀河を管理する神という界王様に修業をつけてもらうべくあの世で奮闘し、ピッコロは悟空の息子、孫悟飯に驚異的な潜在能力を見出し彼と共に修業を始めた。

そしてクリリン、天津飯、ヤムチャ、餃子、ヤジロベーの5人は神の神殿で修業を始めた。現在地球上で最も過酷な修行を積むことができる場所だ。空気が薄いこの場所で神やその付き人のミスターポポに鍛えられることで無駄のない動きとより高いレベルの気の扱いをマスターすることができる。

そうして来たるサイヤ人に備えて厳しい毎日を送って1か月が経った今日、事件が起こった。

「おい、あれは何だ?」

初めにそれに気づいたのはクリリンだった。彼の指差す先にはカメハウス程の大きさの厚みのある円盤が神殿よりさらに上空に浮いていた。その円盤は下部から何本もの足を出すとゆっくりこちらに向かっている。

「な……なんと！　あれは……まさか……!!」

戦士たちはその物体を不思議に思いこそしたが恐れてはいなかった。だが、威厳をかなぐり捨てて神殿からバタバタと飛び出してきた地球の神の顔を見てそれが間違いだったことを知る。

「おい……もしかしてあれは……」

「サイヤ人の宇宙船か!!」

サイヤ人の襲来は1年後のはずだが、その情報も死に際のラディッツからもたらされたもの。時期の大幅なズレや不意打ちがあってもおかしくない。そう判断した戦士達は着陸する前に倒そうと宇宙船に攻撃した。かめはめ波、どどん波、気功砲、操気弾と各々の自慢の技で宇宙船を狙う。

パチンッ

だがその瞬間、辺りに指を鳴らした乾いた音が響いた。すると宇宙船がその場からパッと消え、戦士達の技は上空へ消えていく。

「なっ!?　消えた!!」

「いったいどこへ……!!」
「ここですよ。」
　クリリン達は消えた宇宙船を探そうと辺りの空を見渡した。だが割とすぐ近く、クリリン達の目の前から聞きなれない声が聞こえ、ぎょっとしてそちらを向いた。そこにはメイド服を着た銀髪の少女が立っており、一体どうやったのか宇宙船もいつの間にか着陸を完了していた。
「う、ああ……あ……」
「こ、これは……」
　そうして場面は冒頭へ戻る。戦士達は目の前の少女――咲夜から感じる途方もない力に動けずにいた。それもそのはずで、今のクリリン達と咲夜とでは戦闘力の数値がかけ離れている。1年間ここで修行を積んだ後ならともかく、今のクリリン達の戦闘力は数値にして三桁、気を解放して極限まで高めてもやっと四桁に届くというレベル。それに対し咲夜の戦闘力は3万、それにクリリン達は知らないが不死身の力で気円斬などの格上殺しの技も通用しないという理不尽さ。今この場にいる戦力全員で束になってかかっても倒せない、そんな存在が咲夜なのだ。ここで修業して、相手の気を感じることができるようになった戦士達はその現実とプレッシャーに雁字搦めにされて動けない。
「はあ、せっかく地球の皆様に警戒心を与えないように着陸地点をこの神殿に指定しま

したのに、いきなり酷いことするじゃありませんか。」
　咲夜のその言葉に驚いたのは地球の神だ。彼女の言っていることが本当なら、彼女はこの神殿が地上に住む者達に知られておらず、かつ重要な場所だということを知っていることになる。この少女は宇宙人だというのにあまりにも地球のことを知りすぎている。
「こほん、ではまず自己紹介から。お初にお目にかかります、私はフリーザ軍所属、フリーザ様専属召し使いの十六夜咲夜と申します。」
　以後お見知りおきを、と、咲夜はこの緊迫した状況の中完璧な礼を地球の神相手にした。その場違いな行動にハッと正気に戻ったクリリンが疑問を口にする。
「フ、フリーザ軍……？」
「はい、宇宙の帝王フリーザ様が率いる、宇宙最強にして最大の組織です。サイヤ人が所属している軍であり、私は彼らの上司と言えば分かりやすいでしょうか？」
「「っ!?」」
　咲夜の言葉にこの場の全員が衝撃を受けた。何せ彼らからしてみればついこの間地球に来たラディッツで宇宙の広さを知り、奴よりもさらに実力が上だという二人のサイヤ人に備えて鍛えていたところなのだ。その二人も見ぬ内からさらに上の存在に出てこられては困惑するに決まっている。

そしてそれは地球にとってかなり絶望的な状況にあることを意味していた。ラディッツが言うには奴が着けていたスカウターという装備に通信機能が備わっている。もし、宇宙の地上屋だというサイヤ人達の所属する組織が通信機能でドラゴンボールのことを知り、本格的に地球侵略を目論んでいるとしたら、正直詰みだ。ラディッツクラスの敵が何千、何万と地球に押し寄せる。考えただけで寒気がする。

そこまで想像して顔を緑色から真っ青に変えた神を見て咲夜がフフッと笑う。

「そう怯えなくてもいいですよ。私の目的は侵略ではありません。それはこちらに向かっているサイヤ人達に任せれば十分ですからね。」

「……では聞かせてくれぬか、お前の目的は何だ?」

「簡単なことです。先日こちらにラディッツというサイヤ人がお邪魔しましたでしょう。彼は私の生徒であり、息子のような戦士。彼を弔うために伺いました。彼の遺体を渡していただけませんか。」

「……残念ながらそれはできない。奴の身体は地球の神である私が責任を持って焼却した。」

神の返答に咲夜は、まあそうだろうな、と肩をすくめた。結果的にラディッツが地球でやったことと言えば農家のおっさん一人を殺した程度だが、地球からすれば立派な侵略者だ。人の目に触れぬよう入念に処分してしまうのが妥当だろう。

「そうですか、ではせめてラディッツの装備品一式を渡していただけないでしょうか。我が軍が戦闘用に開発した戦闘服はこの星の技術では処分できていないはずです。」
「……」
神の返答はない。別にあの装備を手放すことを惜しんでいるわけではない。むしろあれを渡すだけでこの少女が去ってくれるのなら願ってもないことだ。
だが、あの装備はブルマという女科学者が研究のためにスカウターと共に持ち帰ってしまってここにはない。そのことを伝えてもいいのだが、そうすると目の前の少女はブルマの下へ向かうだろう。地球の神として地上の者を危険にさらすわけにはいかない。
「…あれを渡すのは吝かではない。だがあれは今地上にあってここにはないのだ。ここにいる者に取りに行かせる。それまで待ってはくれぬか。」
「大方予想はつきます。スカウターの音声データに科学者らしき女性の声がありましたからね。おそらくラディッツの装備品は彼女の下にあるのでしょう。私も職務の合間に来ているので時間がありません。案内してください。」
「……」
「……だんまりですか。となれば多少無理やりですが、ここでラディッツの無念を晴らすとしますか。あなたの自慢の戦士達が一人二人と殺されれば喋る気になるでしょう。」

「「っ!!」」

咲夜は両手をダランと下げてそこから少し広げ、左足を前に出した。彼女の敬愛するフリーザと同じ構えだ。すると彼女を中心に突風が吹き荒れ、ピンク色の気の炎が燃え上がる。彼女が立つ神の神殿にもクモの巣状にヒビが入り、木も何本か倒れる。

その濃密な気の圧力にクリリン達は息を呑んだ。無理だ、勝てるわけがない。太陽拳による目くらまし、餃子の超能力、命を懸けた気功砲、様々な策は浮かんだがどれも成功する気がしない。こんな時に頼りになる悟空も今はあの世で修業中だ。

万事休すか、そう思った時だった。

「魔貫光殺砲っ!!」

「「!!」」

「へっ!　ざまぁみやがれ。」

「ピッコロ!!」

突如飛来した螺旋状の極細の光線が後ろから咲夜の眉間を貫いた。その後ろではいつからそこにいたのかピッコロが得意気に笑っている。いくら強いとはいえ、咲夜の表面的な防御力自体はそこまで高くない。格上殺しの技として有名な魔貫光殺砲はいとも簡単に咲夜の頭に風穴を開けた。

ともあれ、ピッコロが咲夜を打ち倒してくれたことでクリリン達の表情も晴れる。

「…行儀の悪い方がいますね。」
「なっ…!!?」
　だが、咲夜の傷が瞬時にふさがったことですぐに凍り付く。咲夜は青い瞳でギロリとピッコロを睨むと右の手の平を彼に向けた。
　ズオッ!!
　そして魔貫光殺砲とは対照的な太い、衝撃波状の気功波を放った。その威力にクリリン達は思わず顔を庇った。次に目を開けるとそこには無残に抉り壊された神殿があるだけで、ピッコロの姿はなかった。
「ピッコロ…!!」
「まさかやられたのかっ!?」
「いや、この私がまだ生きている。どうやら何とか生き延びたようだ。」
　その光景に天津飯やヤムチャがピッコロの死を心配するが、ピッコロと命が繋がっている神が生きていることからその心配はいらなかった。原作知識からピッコロと神とドラゴンボールの関係を知っていた咲夜が気功波の威力を抑えたこととピッコロが咄嗟に受け身を取ったことでピッコロは消滅を免れた。
「さて、スカウターの情報から察するにあの者が現時点でこの星最強の戦士なのでしょう?」

「……」
「どう頑張っても私には勝てないと思いますが？」
「……」
「それとも、もう少し私の力をお見せしましょうか？」
「……分かった。お前の言う通りにしよう。だが約束してほしい、地球の者達に一切危害を加えないと。」
「ええ、もちろん。」
　この場は結局神が折れることとなり、クリリンがブルマの下へ咲夜を案内することになった。二人が神殿から飛び立って残された天津飯達は咲夜のプレッシャーから解放されてその場に膝をつく。
「くっ……！　フリーザ軍か……!!」
　そして地球の脅威はサイヤ人だけに終わらないと確信した彼らはより一層厳しい修業に打ち込み始めた。

Ｚ・ナメック星編・６

▼

神殿から飛び立ったクリリンと咲夜は西の都を目指して飛んでいた。ラディッツの

戦闘服はブルマが彼女の実家に持って帰ってしまったからだ。なんでも、あの戦闘服を分析すればあれと同レベルの防御力の道着を作れるかもしれないとのことだ。

それで西の都のブルマの家を目指して飛んでいるわけだが、速度はそれ程速くない。せいぜい鳥より少し速い程度だ。ピッコロならいざ知らず、まだまだ修業不足のクリリンの舞空術ではこれが目一杯だった。

だが、今よりももっと速く飛べるはずの咲夜は何も言わずにクリリンに合わせている。職務の合間に来ているから急いでいると言っていたのに。クリリンはそこが疑問だった。

「……あの、クリリンさん。」

「っ!!　な、何だよ?」

そんな時、急に咲夜がクリリンに話しかけた。クリリンはいきなり何だ、とか、何で俺の名前を知ってるんだ、とか色んな疑問が生まれたが、何とか反応した。

「カカロット……悟空は元気に育ちましたか?」

「へ?　あ、あぁ元気だよ。今は死んじまってるけど。」

「強く、なりました?」

「……あぁ強いよ、あいつは。ちょっと前までは一緒に修業してたのに、今や世界を救った英雄さ。」

「…そう。」

何やら嬉しそうに微笑んだ咲夜を見てクリリンは首を傾げた。

実を言うと咲夜が急いでいるといったのは嘘である。職務の合間に来て急いでいることは間違いないが、地球と惑星フリーザは片道1か月かかる道のり。今更1時間や2時間待ち時間が発生したところで変わらない。

では何故こうしてクリリンと飛んでいるかというと単純に見て回りたかったからだ。バーダックが己の意思を託した息子が育ち、旅した地球を。悟空の一番の友であるクリリンと一緒に。神の神殿の下部から伸びる如意棒、カリン塔、西の都と、悟空がそこで誰と出会い、どんな体験をしたのかを想像しただけで咲夜の顔が自然と緩む。その様はまるで息子の成長を喜ぶ母親のようだ。

「うえぇぇんっ！　風船が～！」

西の都に入り、ブルマの家、カプセルコーポレーションの目の前に降り立った時だった。クリリンは大通りで小さな女の子が泣いているのを見かけた。彼女の前には木の少し高い位置の枝に引っ掛かった熊の風船がある。

「はい、どうぞ。」

「わぁ！　ありがとうお姉ちゃん！」
「え!?　あ、あれ!?」
　助けてあげたいが今は咲夜を案内している途中だ。どうしようかと振り返るともうそこに咲夜はいなかった。もう一度女の子の方を見るともう咲夜が風船を取ってあげており、クリリンは混乱した。
「……」
　去っていく女の子に小さく手を振る咲夜を見てクリリンは考える。もしかして咲夜は、軍の職務を全うしているだけで自分達が考えているほど悪い奴ではないのではないか。もちろん、サイヤ人達の上司と言うからには命令があれば平気で人を殺したり、星を壊したりするだろう。だがこの咲夜という少女はこの前来たラディッツとは決定的に何か違っていた。ラディッツは徹底的に地球人を見下し、星の原住民以上の認識は持っていなかったが、咲夜はちゃんと人を人として認識している。そればかりか、誰かを助けるという優しさも見せている。そもそも戦死したラディッツのためにわざわざ地球に来たというのが悪人にしては人間味が溢れている。
　悪人であって、悪人じゃない。そんな矛盾した何とも言えない印象を咲夜から受けた。
「？　クリリンさん、どうかなさいましたか。」

「あ、あぁいや！　何でもない！」
　気が付くと咲夜の顔が目の前にあり、クリリンは驚いて気を取り直した。一瞬気を許しかけたが、どの道咲夜は地球の敵なのだ。緊張感は最後まで持たなくてはならない。クリリンはパンパンッと自分の頬を叩いてインターホンを押した。
「何？　クリリン？　どうしたの？　神様んとこで修業してたんじゃなかった？」
　そしてしばらくするとブルマが出てきた。地球が誇る天才科学者は今日も今日とて元気がいい。
「？　ちょっと、誰よ後ろの娘。まさか彼女？」
「十六夜咲夜と申します。どうぞお見知りおきを。」
「あらまぁ、私ブルマ。よろしくね。」
「ブ、ブルマさん！　これから説明しますから！」
　何やら面倒くさい勘違いをされそうになり、慌てて咲夜の素性を説明する。咲夜がサイヤ人達のさらに上の存在だと知るとブルマは飛び上がって驚いた。
「大丈夫ですよブルマさん。用が済んだら早々に立ち去りますので。」
「そういうわけなんでブルマさん。あのサイヤ人の服とか鎧とか全部持ってきてもらえませんか？」
「服ね!?　鎧ね!?　分かったわ！　すぐ持ってくるっ!!」

そう言うとブルマはピュンッと脱兎のごとく奥へ引っ込んでいく。そして1分もかからない内にボロボロの戦闘服と戦闘用ジャケット、そしてラディッツが左腕と左足に着けていた赤いリングを持って戻ってきた。しかしその中にスカウターは含まれていない。どうやらちゃっかりそれだけもらう腹積もりのようだ。それくらいなら気にする程でもないので、突然押し掛けた迷惑料として置いて行くことにした。

「……」

咲夜はブルマからそれら一式を受け取る。研究のために一度洗浄したのか、所々破けていたりするものの、血や泥などの汚れは一切ついていなかった。魔貫光殺砲で空いた戦闘用ジャケットの腹部の穴が、咲夜にラディッツの死に様を連想させる。そしてこの赤いリング。確かこれはレナと出会ったあの惑星を侵略した時に……

「！　お前……」

そこまで考えて咲夜はブルマとクリリンから怪訝な目で見られていることに気が付いた。彼らの視線を追って自分の頬に触れてみると、右目から一筋の涙がこぼれていた。その事実にまず目を見開いた。そして自分の目から排出された一滴の涙を指で拭い、それを見るとフッと笑った。目を閉じて、ラディッツの服をギュッと抱きしめると小さく呟いた。

――ああ、そうだったんだ。

「え？」
　それが聞こえたのは近くにいたクリリンだけだった。
「ありがとうございます。では、私はこれにて失礼いたします。」
「え、ええ。」
　咲夜はブルマに綺麗に礼をすると、宣言通りにその場から飛び立った。恐らく神殿へ戻り、同じように神達にも礼をして自分の星へ去っていくのだろう。
「……ねぇクリリン、あの子本当にサイヤ人の仲間なの？」
「…俺も同じことを考えていたんです。あいつ、そんなに悪い奴には到底思えなくて……」

▽

ブルマさん達と別れた私は宇宙船に乗り、地球を発った。宇宙船の中でラディッツの赤いリングを自分の足に装着した。ラディッツ用のサイズだったそれは私の足にはいささか大きく、位置的にスカートの中に入る程太ももまで上げてようやくフィットした。それはまるで原作の咲夜さんがスカートの下にナイフを忍ばせているようだ。

このリングは、私の意思表明の表れだ。ブルマさんからラディッツの装備を受け取って、彼の死を直に感じてようやく気付いた。私は今のこの立場、フリーザ軍の一員〝十六夜咲夜〟としての生活を気にいっていたんだ。

私は先入観で、今は敵でもいずれ悟空サイドに立てるんだと勝手に思い込んでいた。前世でいくつか目にした二次創作作品の中の、私と似たような境遇の主人公が大概そういった経路をたどることが多かったから。だからこそ私はそれを理由に、今まで自分が犯してきた悪事に言い訳してきた。人を殺す度に、フリーザ様には逆らえないからと、星を壊す度に、今だけは仕方ないからと、日本人としてのちっぽけな正義感を守るために、己が作りだした惨状に背を向けてきた。ナメック星でフリーザ様を悟空が倒すまで、そうするのが正解だと信じていた。

だけど違った。私はそんなことを望んでいなかった。サイバイ執事達を訓練して、休日はザーボンやドドリアと一緒に出掛けて、フリーザ様とワインを楽しみながらフリー

ザ軍勢力下の星域の地図を見てニヤニヤして、たまに誰かと星を攻めて、ギニュー特戦隊の皆と新しいポーズを考えて…

私、〝十六夜咲夜〟の居場所は主人公組じゃない、悪役だったんだ。

モヤモヤした気持ちの正体はこれだったんだ。何故今まで気づけなかったのだろう。今まで色んな人に失礼な態度をとっていたと思う。バーダック達を見殺しにした時はひたすら自分が生きるためだと言い訳していたと思う。これでは散っていったバーダック達も浮かばれないだろう。それに、ラディッツ。彼もバーダックの息子だというのに、心のどこかで物語序盤で退場するキャラだと思い、もしかしたら投げやりな態度をとっていたかもしれない。

だけどそれも今日でおしまいだ。私は自分の居場所をしっかりと認識した。十六夜咲夜はフリーザ軍の優秀な兵士で、フリーザ様専属の瀟洒な召し使いだ。いつの日か悟空と敵対して、殺し合いをするかもしれない。それでもいい。私はフリーザ軍に忠誠を誓い、フリーザ様と共にこの宇宙に帝国を築く。

さて、軍に戻ったら何をしようか。確かナメック星のポルンガは願いを3つ叶えられたはずだ。もしナメック星に行くことになったらフリーザ様の不老不死の願いを叶えた後に、ラディッツを生き返らせることを頼んでみよう。そしてラディッツに一言でいいから謝りたい。彼はバーダックに似て鈍感だから、きっと首を傾げるだろうけど、一

から関係をやり直して、悟空に負けないくらいラディッツを強くしてやりたい。
軍のためにできることだってまだまだたくさんある。私の現世は結構漫画好きで、ドラゴンボール以外の漫画の知識もあるし、ツフル製マシンミュータントとして教え込まれた知識もたくさんある。私の身も、心も、すべてをフリーザ様のために、私の居場所のために捧げていこう。犯す悪事もしっかり認識して、幾多の死体や瓦礫の上に立ち、それでも笑って楽しく生きていこう。
銀河を統べる界王達に恐れられ、宇宙の頂点に立つ界王神にも存在を知られる宇宙の帝王フリーザ。私はその隣に立つ十六夜咲夜なのだから。

それから1か月後、私は惑星フリーザに帰還した。フリーザ様に帰還報告をするため王城のフリーザ様の自室の扉をノックする。
「どうぞ。」
「失礼します。」
中に入るとフリーザ様はワイングラスを片手に窓から星を眺めていた。その隣ではサイバイ執事達がカチャカチャとワインとお茶菓子のセットを片付けている。この様子だと、しっかり私の代わりを務めてくれていたようだ。
「十六夜咲夜、ただいま地球より帰還いたしました。偵察の準備も完了です。」
「そうですか、ご苦労様です……おや」
「？　いかがなされました？」
「何やらスッキリした顔をしていますね。地球で何かあったんですか？」
どうやら我が主にはすべてお見通しのようだ。その事に私はとても嬉しくなる。
「はい、自分を見直す機会がありまして…」

「そうですか、いつにも増していい顔をしていますよ。」
「ありがとうございます。」
「さて、咲夜さんが戻ってきたことですし、ハーゲル星域の経営についての書類を片付けてしまいましょうか。」
「はい。」
　私はすぐさま時を止めて仕事用の環境を整える。ハーゲル星域の経営状況に関する資料に羽ペン、フリーザ様の印鑑、そしてハーゲル星域の情報をダウンロードとした情報端末だ。いつもの定位置に付き、敬愛するフリーザ様の隣で宇宙支配を進める。仕事をしながら改めてこう思った。
　――ああ、やっぱりこの方の隣が私の居場所だ。

エピソード・オブ・ラディッツー1

▼

ここはあの世、宇宙中すべての死者の魂が集まる場所である。生き物は死ぬと魂のみの状態でここを訪れ、生前の行いから天国行きか地獄行きか審判を下される。辺りは見渡す限りの黄色い雲の絨毯であり、唯一確認できる大仰な建物の入り口からは数えられない程の魂が行列を作っている。

「うぃ〜…」

「こら！　そこの魂さん！　列を乱さないで！」
酒瓶を持ち、顔を真っ赤に染め上げた犬の獣人型の宇宙人が千鳥足で列から離れ、道の真ん中に寝転んだ。それを見た行列整理担当の小柄な鬼がメガホンで獣人に注意する。注意された獣人は、あいあい、と曖昧な返事をして列に戻った。この獣人の男は酔い過ぎて道路に飛び出して車にひかれて死んだのだが、死んでも反省していないらしい。
ドンッ
「あ～いや、ごめんなさいよ～。」
列に戻るときも千鳥足な男はその際に誰かにぶつかった。衝撃でどてっと尻もちをついた男はぶつかった相手を見上げながら平謝りをする。
「……」
「ひ、ひゃあぁぁっ!!」
そして相手の顔や服装、極めつけに腰に巻いてあった茶色い尻尾を見て悲鳴を上げた。ぶつかった相手は宇宙でも悪名高きサイヤ人の戦士、ラディッツだったからだ。男の悲鳴を聞いた他の魂たちもラディッツの顔を見て恐れおののき、彼から距離を取る。それによって大きく列が乱れ、さっきの鬼が駆けつけてきた。
「はいはい皆さん落ち着いて。この人が生前どんな人だったか知りませんけど、今は肉

体を失って全然怖くありませんから。」

こういう事態に慣れているのか、その鬼はあっという間に騒動を解決した。こちらをチラチラ見ながら整列し直す魂達を見てラディッツは不機嫌そうにチッと舌打ちをした。

地球で悟空とピッコロに負け、戦死したラディッツもあの世へやって来ていた。遠い昔に咲夜が地球に飛ばしたという弟カカロットを、ベジータ、ナッパ、自分の３人で構成される部隊に加えようと地球に来たラディッツだが、蓋を開けてみれば二人がかりとはいえ格下の見下していた奴らに無様に殺され、魂のみになって何もできずに分かりきった審判を待つしかないという現状。ラディッツは今最高に機嫌が悪かった。

「ちょいとちょいと、お兄さん。」

「……何だ。」

そんな時、ちょうど自分の後ろに並んでいたワニ型宇宙人の老人が話しかけてきた。憂さ晴らしに気功波でバラバラにしてやりたい気分だが、今やそれすらできない自分の情けなさにため息をつきながら返事をする。

「あんた随分怖がられてるね。何をやらかしたんだい？」

「……戦士として、誇りのために戦ってきた。ただそれだけだ。」

老人の質問に、ラディッツは長考した後にそう答えた。老人は満足したのか、「ふぇっ

ふぇっふぇっ、そうかそうか。」とケタケタ笑いながら離れた。一方ラディッツは老人に答えた自分の答えに、本当にそうだっただろうかと自問を始めていた。思えばベジータ達と一緒に行動するようになってから、侵略、侵略、侵略、の連続でこうやって自分を冷静に見つめ直す機会はなかった。順番が回ってくるまでの暇つぶしにラディッツは己の人生を振り返り始めた。

自分の幼少期は、偉大な親父、バーダックの背中をひたすら追いかけていたと思う。いや、その目標は今でも変わらない。

下級戦士の生まれである自分は生まれてすぐ辺境の星へ飛ばされた。もうその星の名は忘れたが、とにかく星の制圧を済ませて母星に帰還した時、親父の大きな背中に憧れた。下級戦士でありながら、エリート戦士に引け劣らない強さで一線で戦い続ける父の姿に、サイヤ人の誇りというものを子供ながら感じ取った。

そこからの自分は、1日でも早く親父のような戦士になろうと必死だった。下級戦士が一人前の戦士になるために突破しなければならない壁である戦士承認試験、それを越えるために凄まじい特訓を繰り返した。当時新たにフリーザ軍の幹部に就任した咲夜が、休日の度に惑星ベジータにやって来ては自分達サイヤ人のガキに訓練をつけた。本人は、フリーザ軍の未来のために優秀な戦士の育成に手間は惜しまない、と言って、ご立派な忠誠心だと内心呆れたが、咲夜は戦闘力はやたら高かったので大いに利用させて

もらった。休日になると自分と、親父にそっくりな同い年のサイヤ人と共に朝から晩まで咲夜に殴りかかっていったもんだ。

そうしてしばらく時間が経ち、ようやく試験に合格した。一緒に訓練していたサイヤ人はいつの間にかいなくなっていたが、俺はようやく戦士として一人前になった。その事がとにかく嬉しかった俺は咲夜へ手短に報告し、カカロットの顔を一目見てすぐに侵略に飛び立った。結果は惨敗。いくら一人前の戦士になったとはいえ、試験の傷も癒さずに出発し、しかも気が大きくなっていた俺は自分のレベルを遥かに超えた星を攻めた。たまたまその星の怪獣のような化け物共を相手に、トレーニングと称した暇つぶしをしていたベジータとその側近ナッパに助けられて一命をとりとめたんだ。

そのすぐ後、俺は惑星ベジータが巨大隕石の衝突で滅んだという事実をベジータ達から聞かされた。親父も、ベジータの親父であるベジータ王も、カカロットも、サイヤ人が今まで築き上げてきたものがなくなったと聞いて、俺は頭が真っ白になった。まあ、カカロットは後に咲夜から辺境の惑星に飛ばしたので無事という話を聞いたが。

そうしてフリーザ軍に戻った俺は、ベジータが組織した生き残ったサイヤ人だけの遊撃部隊に属することになった。ただそれは形だけで、まだ戦闘力が完成していなかった俺は戦力外の補欠扱いだった。基本ベジータとナッパだけが仕事をこなし、俺は再び咲夜の下で自分を鍛える日々だった。「弱虫ラディッツ」というあだ名はこの頃からベ

ジータ達が呼び始めた蔑称だった気がする。

「……誇りか。」

ラディッツは自分の左手を見つめ、握る。果たして自分は、サイヤ人として誇りある人生を送ってきただろうか。あの頃父の背中から感じたものと同じものを、自分は背負ってこれただろうか。制圧した星の数、撃墜した敵のスコアは決して悪くない。むしろ下級戦士として上出来だと自分でも思う。

だけど、何か足らない気がする。あの時見た父に自分を重ねるには何かが足りない、満たされない。一体何だというのだ。親父にあって、俺にないもの。

そこまで考えたラディッツの脳裏に、ある星を咲夜と共に攻めた日のことがよみがえった…

▽

「ふっ！　くっ！」
「頑張ってくださいラディッツ。あと５０回です。」
　惑星ベジータが滅んで早５年、未だベジータ達に戦力として見てもらえないラディッツはトレーニングルームで今日も咲夜と訓練をしていた。今日の訓練は両手足に重りを付けての筋トレという初歩的なもの。とはいえ、これは咲夜がラディッツの適性や成長速度、健康状態などを観察して組んだトレーニングメニューなので、ラディッツが自己流でやるものより遥かに効率がいい。この５年で徐々にではあるが、ラディッツは着実に戦闘力を伸ばしていた。
　２０分程経つとラディッツは重り付き腕立て伏せ１００回を終え、両手足の重りをごとりと外す。ラディッツは今年で１２歳になったが、見た目は５年前とほとんど変わっていない。ある程度の年齢までは子供の姿で油断させるというサイヤ人の特性のためだ。筋トレを終えたラディッツは大の字に寝転び、ゼーゼーと息を荒くする。
「今日の訓練はここまでです。」
「ゼェ…まだだ…ハァ…さくや……おれはまだやれる…ぞ…」
「ダメです。訓練はただ自分を追い込めばいいというものではありません。休息もしっ

かり取らなければ成長を阻害してしまいます。」

そう言って咲夜はラディッツが回復するのを待った。ここ最近のラディッツは焦っている。それは咲夜も感じ取っていた。憧れの父の背中に追いつきたいのに一向に伸びない自身の力。そのギャップに悩んでいるのだ。辺境の星から惑星ベジータに帰還した時の戦闘力が３１０、この５年で必死に訓練した結果５３２。客観的に見れば充分に成長していると言える。だがラディッツはバーダックの息子として、生き残りのサイヤ人仲間であるベジータ達に相手にもされない今の状況が我慢ならないらしく、必要以上に自分を痛めつけようとする。

「…ラディッツ、何度も言うように貴方は大器晩成型なんです。ベジータ王子のように早熟ではなく、じっくり時間をかけて成長していくタイプなんです。今はもどかしいかもしれませんが、そんなに焦らなくてもいいんですよ。」

「……」

咲夜のアドバイスにラディッツは答えない。そう言われても自分では実感がわかないのだろう。無言で立ち上がり、壁にかけてあったタオルで汗を拭いて水筒の水を飲むとそれらを咲夜へ投げ渡した。咲夜はそれを受け取ると小さな手提げ型のカゴに入れる。さながら部活のマネージャーのようだ。

「では行きましょうかラディッツ。そろそろ昼食の時間です。」

「……ふんっ。」

トレーニングルームを後にした二人はタオルと水筒を一旦咲夜の部屋に置き、食堂へ向かう。そこに間が悪いことに任務終わりのベジータとナッパが前から歩いてきた。二人の姿を見たラディッツは気まずそうに顔を反らす。

「くくくっ、ごくろうなことだなラディッツ。きょうもさくやさんといっしょにとっくんか?」

「まったく情けない奴だぜ!　サイヤ人がツフル人に戦いを教わるなんてよ!」

「っ!」

ベジータとナッパの言葉にラディッツは悔しそうに唇をかむ。彼らからしてみれば5年も訓練して未だに戦闘力が完成しないのはありえないことらしい。ベジータはともかくとして、戦闘力で優劣が決まるサイヤ人の価値観に染まりきったナッパはガハハッと遠慮なしにラディッツをいびる。

この辺りの価値観も、ベジータ王の世代が残した負の遺産なのだろうなと、咲夜はこの光景を見て感じた。種族が繁栄していくためにはベジータやラディッツのような次の世代が成長する必要があり、そのためには彼らが育ちやすい環境を作らなくてはならない。

だが現状はどうだ。生まれた時の数値でランク付けをしてしまったがために、子供達

が自分の限界を決めてしまっている。たまたま数値が高かった者が低かった者を笑い、それが双方の成長性をなくしてしまっている。結果出来上がったのはナッパのように、信念もなくただ暴れるだけの戦士が牛耳る社会。さらには驕りも激しく、ベジータ王のように力量差も分からず反乱を起こす。これではフリーザ様もサル野郎と嫌うわけだ。咲夜はため息をつく。

そんなこと知ったことかとベジータとナッパは去っていった。ナッパの高笑いが廊下に響く。咲夜がラディッツの頭をくしゃりと撫でるとラディッツは廊下の壁をドンッと殴った。余程悔しいのか目尻に涙が溜まっている。

咲夜が見るにラディッツの潜在能力は決して低くない。悟空と同じくバーダックの息子なのだ。むしろ高い方である。その高い素質を遺憾なく伸ばすことができるように、この5年間は下地を整える訓練をしてきた。一見地味に見えた筋トレなどの基礎訓練もすべてはそのためである。後は実戦に繰り出し、きっかけがあればラディッツの戦闘力は開花する。

ピピピ……

その時、咲夜のイヤリング型通信機が鳴った。出てみるとザーボンからの連絡だった。

『咲夜、今空いているか?』

「ザーボン様、どうかされましたか？」
『少し話したいことがある。至急会議室まで来てくれ。』
「了解しました。ラディッツ、私は会議室に行ってきます。先に食堂に行っていてください。」
「……ああ、わかった。」
咲夜はラディッツと別れ、会議室に向かった。

エピソード・オブ・ラディッツー２

▼

咲夜が会議室に入るとザーボンが神妙な顔で待っていた。
「失礼します、咲夜です。」
「咲夜、実は少し困ったことが起きてな。」
「と言いますと？」

「キュイと連絡が取れないんだ。」

フリーザ軍きってのエリート戦士であるキュイは先日、新兵の隊を率いてレベルの低い星へ実戦演習に出かけていた。ザーボンが言うには3日前からキュイからの定期連絡が途絶えたままなのだという。状況から考えて何かしらのトラブルに見舞われた可能性が高い。

「この事をフリーザ様は……？」

「まだお知らせしていない。知っての通りフリーザ様は年に一度のコルド大王様への近況報告で出かけておられる。」

このセリフを聞いて咲夜はザーボンの思惑を理解した。彼はこの程度のトラブルはちゃっちゃと解決して何も起きなかったことにしたいのだ。咲夜自身前世でとある会社に勤めていた時、上司に自分のミスを隠したことがあったのでその気持ちはよく分かる。

部下としてはどんな些細な事でも報告するべきなのだが、ここはザーボンに従うしかない。

フリーザ様が不在な今、この惑星フリーザの管理は咲夜、ザーボン、ドドリアの側近三人に一任されている。ザーボンはそんな中起きたつまらないトラブルで自分の信頼を損ないたくないのだろう。

この三人の幹部には派閥が存在する。昔からフリーザ様に仕えていたドドリアとザーボンの派閥は同程度の規模だが、軍歴の浅い咲夜の派閥はまだ小さい。地位は同じ側近でも、そういった背景から実質的な地位ではザーボンは咲夜の上だ。

「……分かりました。私が調査に行きましょう。」

「助かる。キュイ程の者が生死不明となれば、生半可な兵士を送っても二の舞になるだけだからな。」

咲夜は会議室を後にするとガレージへ向かった。咲夜の宇宙船の専門メカニックに指示を出し、宇宙船の発進準備を整える。

今回は一先ずその惑星の状況を調査する。キュイ達の救出はその後、救護用の大型宇宙船を要請して行う。情報がない場所へ大所帯で向かうのはかえって危険だからだ。

咲夜はキュイ達の分を含めた食料を半月分程積み、惑星フリーザを飛び立った。

「さて行先は……キコン星ですか。」

「とおいのか？　そこは」

「惑星フリーザからそれ程離れてはいないようです。３日もあれば……って」

誰もいないはずの宇宙船で話しかけられ、咲夜が振り向くと何食わぬ顔でラディッツが乗船していた。

「ラディッツ……貴方いつの間に乗り込んだのですか。」

「れんちゅうのしょくりょうといっしょにさ。おれもついていかせてもらう」
「危険ですよ？　レベルの低い星とはいえ何があるか分からないんですから。」
「だからこそさ。おやじはたたかいのなかでせいちょうした、だからおれもじっせんでちからをつける。ちまちまときそくんれんしてたってだめだ！」
　ラディッツは何を言っても聞かない様子だ。こういう変に頑固なところまでバーダックに似なくてもいいのにと思う。咲夜はため息をついた。
「仕方ありません。このまま連れていきますが、危険ならすぐ宇宙船に放り込みますからね。」
「ふんっ、きけんがなければちからもつかん！」

▼

ラディッツと二人、戦闘のイメージトレーニングをしながら宇宙船に揺られること３日。目的地のキコン星に到着した。キコン星は新兵隊の実践訓練に選ばれるくらいなのでサイヤ人のように戦闘に長けた種族がいるわけでも、ツフル人のように知能に長けた種族がいるわけでもない。ましてやヤードラット星人やナメック星人のように特殊能力を持つ種族もいない。

ただ岩と砂が一面に広がる殺風景な惑星だ。いるのは岩の影や地中、草陰からこちらの様子を伺い、突然飛びかかってくる虎のような原生生物。フリーザ軍新兵はこの地で１ヶ月間サバイバル生活を行い、戦場で命のやり取りをするための胆力を身に付ける。

「ようやくとうちゃくか。けっ、なんともつまらないほしだ。」

「知的生命体がいない星ですから。だからこそ、キュイ程の者がついていながらこの事態は不可解なのですが。」

キコン星に降り立った二人はスカウターでこの星の生命反応を調査した。二人を取り囲んでいる戦闘力１０００程度の反応はこの星の原生生物。すぐさまエネルギー波で焼き払い、一掃した。

すると原生生物たちの反応が消え、その先に小さな反応が映し出される。
「戦闘力約１００００。弱っていますがこれがキュイでしょう。」
「となるとそれにむらがるたすうのはんのうがへいしどもか。」
それを確認すると二人はすぐさま飛び立った。距離はそんなに離れていなかったようで、すぐにその場所に辿り着いた。そこは岩に上手い事大穴が空いた洞くつだった。
「キュイ、フリーザ軍より救援に参りました咲夜です。無事ですか？」
「おーいしんぺいども！　いたらへんじしやがれ！」
二人はキュイ達の名を呼びながら奥へと進む。しばらく進むと小さく呻き声が聞こえた。そちらを向くと這って二人に近づく人影。
「おまえは……！」
「キュイ。」
「……」
二人が呼びかけるも、キュイは何も言わない。二人は不審がりながらもキュイを助け起こすため手を貸した。

ギュンッ!!
ガッ!!
「がはっ!?」

一瞬の出来事だった。
急に顔を上げたキュイ。その顔はいつもの人を小ばかにしたようなエリート戦士ではなく、血に飢えた猛獣そのものだった。
彼は一瞬でラディッツの顔を掴み、洞くつの壁に叩きつけた。その衝撃で頭皮が切れたのか、ラディッツの後頭部から血が流れだす。
あまりに突然の出来事に何が起きたのか分からないラディッツ。異常に熱い後頭部の熱を感じてようやく自分の身に起きたことを理解する。

「てめっ……！　なにしやがんだ……！」
ラディッツはキュイの腕を掴みながらもう一方の手で気功波を放った。しかし、キュイとラディッツでは力の差がありすぎて何の意味もない。
キュイはその眼光をさらに強め、口元から涎を垂らすとラディッツの顔を掴む握力を強めた。
「があぁぁ……!!」
ラディッツの頭がミシミシと嫌な音を立てた。それを見てギラっと笑ったキュイはもう一方の手を引いて手刀の構えを取った。そしてラディッツの首を落とすためにその手を振り落と――

ザンッ!!!

ボトッという音と共にその手刀は斬り落とされた。キュイが睨むとその先には返り血に染まった銀髪の使用人がいた。彼女は青い無機質な目をキュイに向けている。
「キュイ、ラディッツを離してください。さもなくば軍への反逆と見なし、貴方を処刑します。」

咲夜の言葉に反応したのか、キュイはラディッツを離した。

「ハァッ!!」

ズオッッ!!

しかし、咲夜の気がラディッツへ逸れた所を狙ってキュイはエネルギー波を放った。自身の全エネルギーと生命力さえも注ぎ込んだ明らかに過剰な威力のエネルギー波。キュイが反逆し始めたにせよそうでないにせよ、フリーザ軍のエリート戦士に数えられるキュイの不意打ちとしては妙だ。

まるで知能をどこかに落っことしてきたような獣のような戦い方。そんな状態で倒せるほど、咲夜は甘くない。

ビュッ!!

「っ!?」

「……はっ!」

ザクッ!!

「!?　ぐあぁぁぁ!!」

エネルギー波の中を突き進んできた咲夜はハイヒールのかかと部分をキュイの右目

に突き刺した。キュイは潰された眼球を押さえながらドクドクと血を流してもがき苦しむ。
その間に咲夜はクルクルと華麗に回りながらキュイの背後に着地、手刀を構えてすかさず飛びかかる。
ザンッ！

ごとりとキュイの首が落ち、彼の身体もぐらりと倒れる。フリーザ軍のエリート戦士はあっさりと帝王の召し使いに処刑された。
「ぐっ、くそっ！　きでもふれたのかこいつはっ！」
「戦闘中の尋常ならざる形相、体温、心拍数、判断力。明らかに普通ではありませんでした。」
「しんぺいつかって、はんらんしようってわけでもなさそうだな」
「とにかく異常事態です。ザーボン様に連絡を…」
ボッ!!
咲夜が通信機に手をかけたその時、洞くつの奥から光線銃が撃たれた。そしてぞろぞ

ろと口元から涎を垂らした新兵達が現れる。
「ちっ！　こいつらもきゅいとおなじか！」
「退きますよラディッツ。ここでの戦闘は意味がありません。」
二人は検体として持ち帰るためキュイの亡骸を抱え、洞くつを飛び出した。
一刻も早く宇宙船に戻ろうと空を飛ぶ二人だが、新兵達もその後を追って空を飛ぶ。
「このっ！　ついてくんじゃねぇてめぇらっ！」
飛びながらラディッツが必死に撃ち落としていく。
「これは……フリーザ様に報告せざるを得ない大事のようですね。」